

佐倉市弥勒東台遺跡

— 千葉地裁家庭裁判所佐倉支部埋蔵文化財調査報告書 —

平成9年3月

建設省関東地方建設局

財団法人 千葉県文化財センター

さ くら み ろく ひがし だい
佐倉市弥勒東台遺跡

— 千葉地裁家庭裁判所佐倉支部埋蔵文化財調査報告書 —





S D-001出土
磁器：花器



S D-001出土
陶磁器・土器・瓦

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第299集として、千葉地裁家庭裁判所佐倉支部庁舎増築に伴って実施した佐倉市弥勒東台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧松林寺の土塁・堀跡や多量の陶磁器、鉄滓、坩埚が出土するなど、この地域の中近世の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また文化財の保護普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労おかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成9年3月31日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 中村好成

凡　例

- 1 本書は、千葉地裁家庭裁判所佐倉支部庁舎増築に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県佐倉市弥勒町92-6 ほかに所在する弥勒東台遺跡(遺跡コード212-039)である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、建設省関東地方建設局の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査研究部長西山太郎、北部調査事務所長谷口の指導のもと、研究員白鳥章が下記の期間に実施した。

発掘調査 平成8年8月1日～平成8年8月31日

整理作業 平成8年10月1日～平成8年10月31日

- 5 本書の執筆は、研究員白鳥章が行った。
- 6 焼物(陶磁器、土器)の鑑定に当たっては、豊島区遺跡調査会主任調査員鈴木裕子氏に御指導、御協力を得た。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、建設省関東地方建設局、佐倉市教育委員会、佐倉市史編さん所、千葉県立佐倉高等学校教諭外山信司氏の御指導、御協力を得た。
- 8 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「佐倉」(N I -54-19-14-2) (平成8年発行)

第3図 佐倉市役所発行 1/2,500「佐倉市基本図」(IX-L E09-1, IX-L E09-3) (平成4年発行)

第4図 参謀本部陸軍部測量局発行 1/20,000迅速測図「佐倉」(明治15年測量、20年発行)

第5図 大日本帝国陸地測量部発行 1/25,000地形図「佐倉」(大正10年測量、14年発行)

- 9 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成8年撮影のものを使用した。
- 10 本書で使用した図面の方針は、すべて座標北である。
- 11 焼物の分類の基準は、新宿区厚生部遺跡調査会発行「細工町遺跡」別冊1 江戸遺跡検出のやきもの分類(兼凡例)を参考にした。
- 12 出土した遺物は、材質別に、陶器(炻器を含む)、磁器、土器、瓦、鉄製品、銅製品、石製品、ガラス製品、その他の9項目に分類した。
- 13 焼物は機能(用途)別に碗類、皿類、徳利類、神仏具類、灯火具類、貯蔵具類、食卓鉢類、調理用鉢類、煮炊具類、調理用具類、暖房具類、煙草道具類、化粧道具類、鍛冶具類、その他に分類した。また、それぞれを器種別に細分化した。
- 14 焼物の生産地は、「瀬戸・美濃産」を例として末尾に「産」を付して表示した。なお、編集の都合上、一部「産」を省略してある部分がある。
- 15 遺物の図版は、写真図版に主眼を置き、その中から特徴的な器種を抽出して実測図化した。したがって、挿図の遺物番号には欠番が生じている。染付等の絵柄については、一部省略した箇所があるので、写真図版を参照されたい。

本文目次

I はじめに	1
1 調査の概要	1
2 遺跡の位置と環境	2
II 遺構と遺物	5
1 遺構	5
2 遺物	8
(1) 旧石器時代	8
(2) 繩文時代	8
(3) 中近世	8
(4) 近世	8
IIIまとめ	33
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 グリッド設定	2
第3図 遺跡周辺の地形とグリッド配置図	3
第4図 迅速測図『佐倉』	4
第5図 地形図『佐倉』	4
第6図 松井天山千葉県市街鳥瞰図『佐倉』	4
第7図 遺構全測図と土層図	6
第8図 SD-001、SK-001、SZ-001土層図	7
第9図 SD-001出土局部磨製石斧実測図	8
第10図 SD-001出土遺物(1) 瓢類実測図	10
第11図 SD-001出土遺物(2) 瓶頸・鉢類実測図	12
第12図 SD-001出土遺物(3) 節利類・調理用具類実測図	13
第13図 SD-001出土遺物(4) 煮炊具類・調理鉢類実測図	15
第14図 SD-001出土遺物(5) 火火具類・暖房具類・貯蔵具類実測図	17
第15図 SD-001出土遺物(6) 神仏具類・ミニチュア・瓦実測図	19
第16図 SD-001出土遺物(7) 石製品実測図	21
第17図 SD-001出土遺物(8) 鋳冶具類・鉄・銅製品、銅貨実測図	22
第18図 SD-003、SK-001出土遺物実測図	23

表目次

第1表 SD-001出土焼物組成表	24
第2表 SD-001出土焼物観察表	25
第3表 SD-001出土石製品観察表	32
第4表 SD-001、SK-001出土錢貨観察表	32
第5表 SD-001、003出土鉄・銅製品観察表	32
第6表 SD-001出土遺物材質別集計表・組成率表	32
第7表 玉宝山松林寺の歴史変遷表	33

図版目次

巻頭図版 SD-001出土磁器:花器(上)、陶磁器・土器・瓦(下)	母・夫人の供養塔、現松林寺土塁跡、「松林寺古絵図」
図版1 遺跡周辺空中写真	図版5 SD-001出土遺物(1)
図版2 調査区全景、遺構全景、SD-001-002	図版6 SD-001出土遺物(2)
図版3 SD-003-004、SZ-001、SK-001-002、調査風景	図版7 SD-001出土遺物(3)
図版4 現松林寺本堂(旧觀音堂)、土井利勝父	図版8 SD-001出土遺物(4)、SD-003、SK-001出土遺物

I はじめに

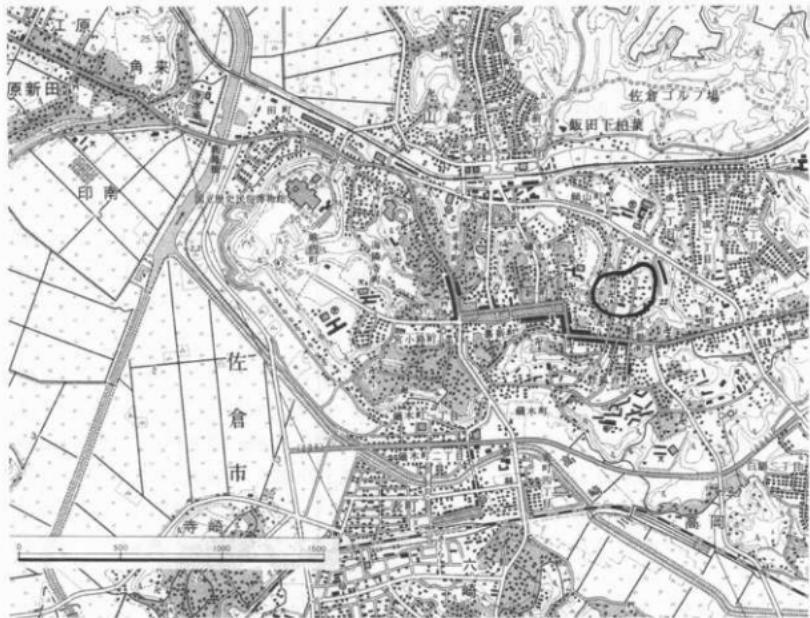
1 調査の概要

千葉地裁家庭裁判所佐倉支部庁舎増築計画地は、周知の遺跡であり、また、隣接地に佐倉城開府の藩主土井利勝の菩提寺である松林寺が所在することから、古代から中近世の遺構が存在する可能性が予測された。

このため、記録保存の措置を講ずることとなり、県文化課の指導に基づき、事業主体である建設省関東地方建設局と財団法人千葉県文化財センターが発掘調査の委託契約を結び、本遺跡の発掘調査を実施するに至った。

発掘調査は、平成8年8月1日から同年8月31日にわたり、584m²を対象に上層本調査と下層確認調査を実施した。

上層本調査における表土除去作業の初日、調査区南西側において、多量の瓦、鉄滓、陶磁器が出土したため、中近世の遺構遺物の存在が予測できた。また、佐倉市教育委員会の教示により、調査地点は旧松林寺の土塁跡・堀跡の一部である可能性が出てきた。これは、現松林寺と検察庁との境界に現存する土塁跡の延長線上にあり、また、松林寺所蔵の『松林寺古絵図』(推定、寛永7年・1630)に描かれている土塁と



第1図 遺跡位置図(1/25,000)

堀の位置と一致することも十分考えられた。

このため、土壘と堀の範囲と方向を確定することに調査の重点を置くことにした。また、表土除去後の遺構確認の段階で、調査区の中央を南北に走る溝状遺構、東側の土壘・堀跡、それと切り合う区画状の遺構が確認できたので、それぞれの遺構の性格と新旧関係、古絵図との整合性を意識しながら調査を進めることにした。

調査区のグリッドの設定については、公共座標を用い、第2図・第3図のように設定した。

上層本調査の結果、旧松林寺の土壘跡と堀跡(近世)、道路状遺構1条(中近世)、掘立柱建物跡1棟(中近世)、土坑1基(中近世)、井戸跡1基(近世)が確認された(第7図)。

遺物は、堀跡(SD-001)から多量に出土した陶磁器、土器、鉄滓、羽口、坩埚、瓦、銅製品、鉄製品、石製品、ガラス製品が中心である。他の遺構からの出土は希薄であったが、東側の堀跡(SD-003)上層から刀剣2振、中層から鉄釘が木質部を付着させたまま箱状に出土した。

下層調査においては、2m×2mの確認グリッドを5か所設定したが、遺物の出土が認められなかつたので、確認調査で終了した。

2 遺跡の位置と環境

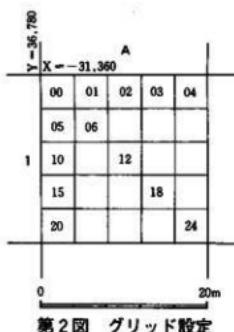
弥勒東台遺跡は、佐倉市弥勒町92-6ほかに所在する。現在は、千葉地裁家庭裁判所佐倉支部の庁舎と淨土宗玉宝山松林寺の境内を中心とする。北東部には、印旛沼が位置し、そこに流入する鹿島川・高崎川と佐倉川に挟まれた標高30m前後の台地に開拓された痩せ尾根状の台地に位置する。

調査区は、旧松林寺の寺域内にある。松林寺の縁起については詳らかではないが、慶長10年(1605)に照譽上人が開山し、観音堂が建立されたと伝わっている。当時の松林寺の寺域は広大であり、佐倉の数多くある寺院の中で最大規模を誇る(第4図)。

土井利勝は、寛永7年(1630)9月、養父母と夫人を供養するために宝篋印塔3基を本堂近くに建立した。これは、松林寺所蔵の「松林寺古絵図」(図版4)に描かれており、現在佐倉市の文化財に指定されている。松林寺は、明治維新で官有地になり、以後、敷地の一部は、佐倉警察署、弥勒小学校(現佐倉小学校の前身)の敷地へと変遷する(第7表)。

明治17年(1884)、佐倉警察署を新町に移転後、松林寺本堂は解体されたが、その理由は不明である。その後、千葉地裁家庭裁判所佐倉出張所が設置されるが、明治42年(1909)、佐倉中学校(現県立佐倉高等学校)を鍋山に建設するため、佐倉中学校の生徒有志が、松林寺の山門から寺域(本堂跡)を南北に貫いて佐倉中学校へと通じる通学路を開削したという。このことは、明治15年測量の迅速測図(第4図)と大正10年測量の地形図(第5図)を比較してみるとよくわかる。大正8年(1919)には、裁判所が現在の地に新築移転されることになった。なお、現在の千葉地裁家庭裁判所佐倉支部の庁舎は昭和38年(1963)に竣工したものである。

今回の調査区は、「松林寺古絵図」に描かれている土壘・堀の南東角(右下)である。南西角の近くにある観音堂は、本堂として現存しており、県指定有形文化財になっている。



第2図 グリッド設定





第4図　迅速測図『佐倉』(1/20,000を200%拡大)



第5図　地形図『佐倉』(1/25,000を200%拡大)



第6図　松井天山千葉県市街鳥瞰図『佐倉』(部分縮小)〔聚海書林刊〕

II 遺構と遺物

1 遺構(第7・8図、図版2・3・4)

(1) SD-001(旧松林寺土壘・堀跡)

調査区の南端、3A-17~19、3B-15・16・20グリッドに位置する。今回の調査の中で最も遺物出土量が多く、全体の99%を占めている。表土除去の段階で、多量の陶磁器と瓦・鉄滓などが出土したが、遺構の性格はつかめなかった。その後、佐倉市教育委員会の教示により、松林寺に現存する土壘跡と、松林寺所蔵の『松林寺古絵図』(図版4)に記載されている土壘・堀跡の位置と一致すると判断した。

残念ながら、調査範囲の境界が堀跡の中央を縦断しており、また、堀跡の南東コーナーもわずかに調査範囲から外れていたため、堀の形状を完全に把握することはできなかった。

堀跡は、箱薬研堀と考えられ、上端の最大幅2.4m、下端幅1.2m、深さ1.6mと想定される。当時、堀跡の内側には、土壘が回っていたはずであるが、今回の調査では、基底部にロームを突き固めた痕跡がわずかに確認できたにすぎなかった。おそらく、近代になってから堀を埋め立てる際に、土壘を削平したと思われる。なお、土壘跡と思われる範囲に調査直前まで桜並木があった。これは、『松林寺古絵図』に、土壘に沿って樹木が植えられている描写の名残かもしれない。

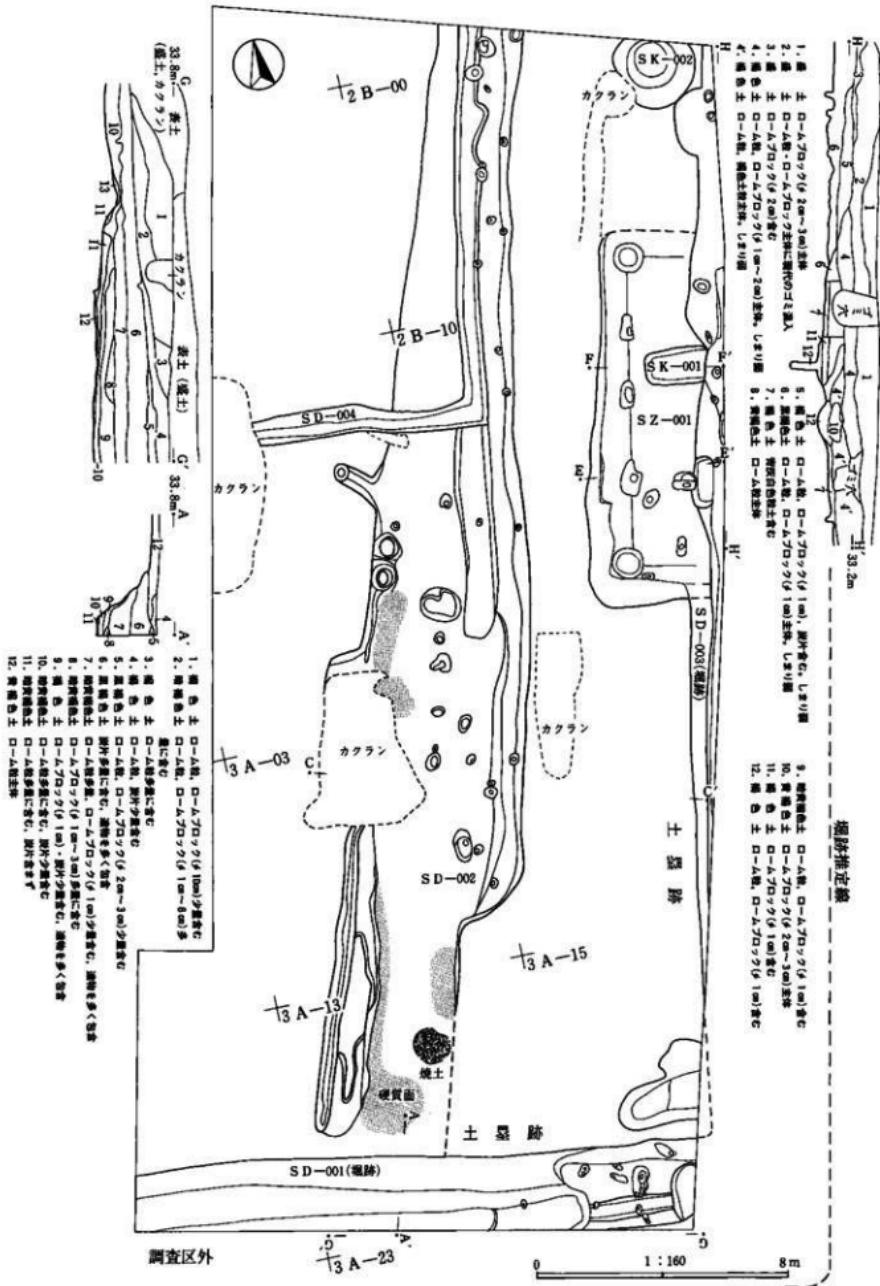
土層図は、堀を横断する形でA-A'、中央を縦断する形でG-G'を設定した(第7図)。土層と遺物の接合関係や遺物の時期差からみて、堀は短期間に埋め戻されたと思われる。なお、遺物は、土層図に出土地点を記録できるもの以外は、すべて一括扱いした。その際、層序とは無関係に、堀の深さを4等分し、上層・中層・下層・最下層に分割して取り上げた。遺物は、上層から下層にかけて出土しているが、中層から下層にかけて集中していた。また、中層・下層には、炭化材粒が多量に含まれており、鉄滓・羽口・坩埚などとの関係も考慮に入れておく必要がある。なお、本層には幕末から明治初頭の陶磁器や近代のガラスなども共伴していたことからみて、堀の埋立ては、明治初期と考えてよいであろう。

なお、堀の南東コーナーに当たる区域は、近現代の擾乱が激しい上に多数の小ビット(径0.2m)が重複し、堀の形状が十分に把握できなかった。

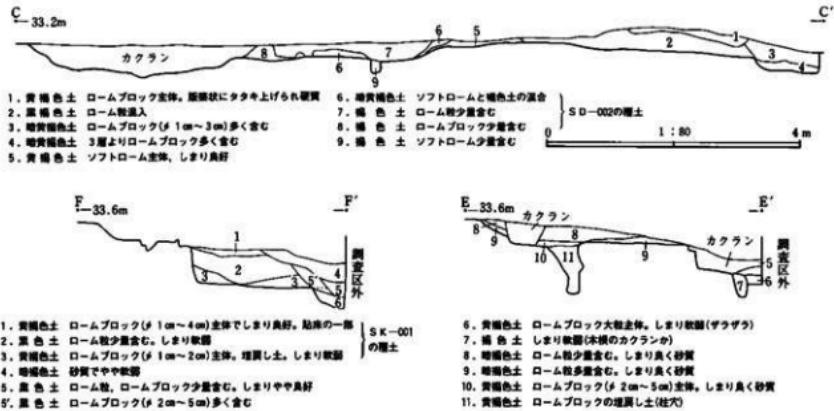
(2) SD-002(道路状遺構)

調査区の中央を南北に走る遺構である。幅約4mで、両脇に側溝状の溝をもつ。一部裁判所の施設建設による擾乱が見られるが、南半分においては、硬化した平坦面が2~3層にわたって確認できたので、道路状遺構と判断した。一方、北半分においては溝の幅が狭まった上に、箱薬研堀状を呈し、細かな凹凸が著しかった。また、その底部をSD-004がL字状に切る。南端部においては、SD-001に切られており、土壘・堀跡よりも古いことが分かる。『松林寺古絵図』によると、絵図が描かれたと思われる寛永7年(1630)には、本遺構は記されていない。しかし、SD-001を跨いだ南側には、SD-002の延長線上に道路が描かれており、堀と土壘を迂回するように描かれている。この道路の名残と思われる道が現存している。したがって、本遺構は、松林寺の土壘・堀が構築されるまでは南北に貫通していたと考えられる。なお、遺物の出土量は少なく、SD-001と同時期の陶磁器と瓦、瓦釘が数点出土した。

(3) SD-003(旧松林寺土壘・堀跡)



第7図 造構全測図と土層図



第8図 SD-003、SK-001、SZ-001土層図

調査区の東端で確認された遺構である。遺構の大半が調査区外のため、全容がつかめないが、恐らく、SD-001と同一の土壘・堀跡の一部と思われる。本遺構周辺は、近現代の擾乱がおびただしい上に、土盛も施されていた。出土遺物は、刀剣2振りが中層のゴミ穴付近から別々に出土した。また、下層から掘り方面にかけて鉄製の角釘が箱状に出土した。また、その下部から、青灰色の粘土が出土した。

(4) SD-004(溝状遺構)

SD-002の底面を切る形で確認された、幅50~90cmの溝である。掘り方は明瞭で、調査区の西北端部に向かって延びている。

(5) SK-001(土坑)

SD-003に切られる形で出土した土坑である。全容は明らかでないが、1.1m×2.5m(推定)・深さ0.6mの方形を呈していたと思われる。出土遺物は永楽通宝1点である。

(6) SK-002(井戸跡)

調査区の北東端(2B-02)に位置する井戸跡である。断面は漏斗形で、上端径2.6m、中端径1.6m、縦坑径0.6mである。深さは、完掘できなかったため未定である。出土遺物は皆無であった。なお、「松林寺古絵図」に井戸の描写があるが、本遺構の位置とは異なる。SD-003で出土した鉄釘は井戸枠に用いられた可能性がある。

(7) SZ-001(掘立柱建物跡)

調査区の北東部に位置し、SD-003とSK-001と重複する掘立柱建物跡である。遺構の大半が、調査区外のため遺構規模は確定できないが、南北両端の柱間寸法は約7mである。台地の緩斜面を整形し、0.25mほどのゆるやかな壁をもち、それに沿って、柱穴が並ぶ。柱穴の形状は、平面形で0.2m×0.45m平均の長方形を呈しており、断面形は、片側が直立した壁なのにに対し、一方は傾きをもち、典型的な中近世の柱穴である。

掘り方面は凹凸が著しく、その上に貼床を施していた。よって、SK-001より時代の下る中近世の遺構と思われる。なお、遺物は中近世の土器・陶器が数点出土した。

2 遺 物

(1) 旧石器時代（第9図、図版7、第3表）

S D-001から、局部磨製石斧が1点出土した(259)。堀跡の覆土からの出土のため、出土層位は不明であるが、石器面全面にプライマリーなローム土が付着しており、旧石器時代の石斧と判断した。

石質は蛇紋岩である。計測値は、最大長8.9cm、最大幅5.4cm、最大厚1.4cm、重量100gである。片面に、自然面を多く残し、その面を利用して刃部まで丁寧に研磨している。一方の面は全面的に剥離が施され、刃部のみ研磨されている。刃部側面の形状は、両刃であるが、側部に当たる位置でわずかにカーブしている。刃部平面の形状は、左右対称ではなく、わずかな片寄りが見られる。この片寄りは、使用と研磨の繰返しによるものか、製作時における所産なのかは不明である。

(2) 繩文時代

S D-001・002から、縄文時代の土器小片が数点出土しただけである。土器片が極小の上、文様も明瞭でないため、時期は不明である。実測図、図版は省略した。

(3) 中近世

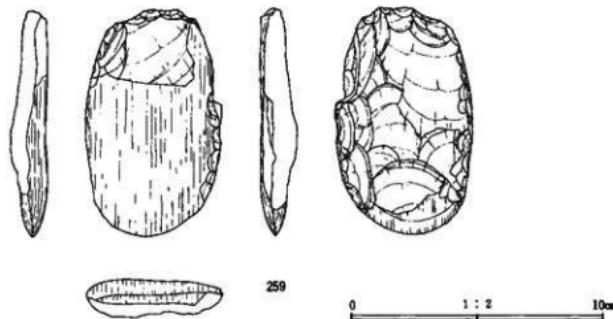
S D-001から陶器と在地產土器が9点出土した。破片が極めて小さいため、器種と生産地の判断が困難であったが、胎土と施釉の様子からみて、中世末から近世初頭の遺物と思われる。実測図、図版は省略した。

S K-001からは、銅錢の永樂通宝が1点出土した（第18図、図版8-362）。

(4) 近世（第10~18図、図版5~8、第1~6表）

S D-001から、多量の陶磁器、土器、瓦、鐵滓、羽口が出土した。また、それらに伴い、鐵製品、銅製品、鐵貨、石製品も出土した。これらの遺物は、前節で述べたとおり、旧松林寺の堀に一括廃棄されたものであり、堀の調査面積にしては極めて膨大な出土量と言える。

S D-001から出土した遺物は、破片数にして総計7,505点である（第6表）。これを、材質別に集計し、組成率を求めるとき、陶器・2,603点（34.7%）、磁器・1,494点（19.9%）、土器・1,822点（24.3%）、瓦・788点（10.5%）、鐵製品（鐵貨を含む）・138点（1.8%）、銅製品（銭貨を含む）・23点（0.3%）、石製品・598点（8.0%）である。以上のデータを、さらに集計すると、焼物類（陶器・磁器・土器）だけで、5,922



第9図 S D-001出土局部磨製石斧実測図

点にも及び、総計の78.9%を占める。

以上が、近世の遺物の概要であるが、個々の器類・器種・材質・年代・生産地・計測値等の特徴は、第1～6表にまとめてある。

以下、SD-001から出土した近世遺物の中から、特徴的なものを抽出し説明する。

ア 焼物類（陶器・磁器・土器）

第1表からもわかるように、実に多種多様の器類・器種・生産地のものが出土している。これらの主流は、いわゆる生活用品である。材質別に見ると、陶器が2,603点（44.0%）、磁器が1,494点（25.2%）、土器が1,825点（30.8%）であり、陶器が半数近くを占める。しかし、個体数（推定）の組成率で比較すると、陶器37.6%、磁器40.2%、土器22.2%となり、陶器と磁器の差は小さい。

次に、器類別の組成率を見ると、碗類が27.6%（推定個体数・38.0%）で、最も高い比率を示している。

生産地別に見ると、陶器は瀬戸・美濃産が、磁器は肥前産が圧倒的に多い。土器は在地産が主体である。以下、器類別に大別し、その中から特徴的な器種を中心に説明する。

碗類（第10図、図版5・8）

1～3は磁器で、瀬戸・美濃産の端反碗である。時期は19世紀中葉である。5は、肥前産の陶器（陶胎染付）で、17世紀末から18世紀初頭のものである。6・7は、18世紀後半の瀬戸・美濃産で、外面は、灰釉と鉄釉の掛け分け碗である。8は、半筒形の陶器（陶胎染付）である。これは、18世紀後半の瀬戸・美濃製品であるが、肥前産のものと同器形・同文様で、いわゆる肥前産のコピー商品である。20は17世紀後半の瀬戸・美濃産の天目茶碗で、内外面に鉄釉が施されている。22～25は肥前産の広東碗で、18世紀後半から19世紀前半のものである。36は、肥前産の薔薇口で、18世紀後半のものであり、見込み團線内に五弁花のコンニャク判が施されている。43は18世紀後半の肥前産磁器碗で、高台高が低く、体部が半球形に丸くなる。陶器の同タイプの碗は、63・64・65・67・68で、同じく18世紀後半のものである。58・59は、17世紀末から18世紀前半の肥前産陶器碗である。外面は、白泥による刷毛目文（横線文）が施されている。60・61は、17世紀後半の肥前産陶器碗である。いわゆる吳器手碗と呼ばれるもので、全面に黄灰色の灰釉が施されている。この器種は出土量が多く、また、器面の光沢が鮮やかである。これは、祭礼・仏事等に使用されたため、使用頻度の低さに起因することも考えられる。62～68は、京・信楽産の陶器碗で、18世紀後半のものである。62は端反碗、63・65・67・68は半球碗で、赤と緑の色絵が施されているが、一部退色しているものもある。64・66は若松碗で、内面から外面体部にかけて透明の灰釉が施されている。69・70-2・71・72は、17世紀後半の肥前産の陶器碗である。生産地は肥前であるが、京焼風の作りである。高台内中央部に工具による円團が施されている。また、69・71には「山原住」、70-2には「清水」、72には「雲」の刻印が認められる（図版8）。40は、17世紀代の肥前産の磁器碗である。外面体部は一重網目文である。42・44は、18世紀後半から19世紀前半の肥前産の磁器碗である。42の内面体部には一重網目文、外面体部には二重網目文が、44には外面体部に二重網目文が施されている。41は、17世紀末から18世紀初頭の肥前産の磁器碗である。外面体部は、型紙摺による草花文が染付けされている。115は、19世紀前半の萩産の陶器碗である。外面体部上半から内面うのふ釉の後、鉛釉を流し掛けている。外面体部下半以下は無釉である。



第10図 SD-001出土遺物(1) 碗類実測図

皿類（第11図、図版5）

80は、白磁で17世紀後半の肥前産である。成形は糸切細工で菱形、体部は花弁状である。83は、1630年代から1650年代の肥前産磁器五寸皿である。型打ち成形で、体部は輪花状である。見込みは半菊文に唐草文である。87は、18世紀後半の青磁五寸皿である。型打ち成形で、体部は輪花状である。92は、18世紀前半の瀬戸・美濃産陶器小皿である。輪禿皿で、体部内外面に志野釉が施され、見込みは輪状に釉が拭き取られている。高台部の周囲は無釉で、内外面に煤が付着しており、灯明皿に転用された可能性がある。94は、19世紀前半の瀬戸・美濃産陶器中皿である。これも輪禿皿で、体部内外面に灰緑色の灰釉が施されている。見込みは輪状に釉が拭き取られ、高台部周囲は無釉である。95は、17世紀後半の瀬戸・美濃産陶器菊皿である。型打ち成形で、体部は菊花状である。全面灰釉で、口縁部の内外面に綠釉が施されている。271は、17世紀末から18世紀初頭の肥前産陶器小皿である。糸切細工で、変形長方形である。内面は型紙摺による斜格子文で、外面体部は松葉文である。

磁器・食卓鉢類（第11図、図版5）

96~98は、18世紀中葉から後半にかけての肥前産染付鉢である。99は、18世紀後半から19世紀前半の肥前産である。端反形の鉢で、内外面菱文散らしの染付が施されている。また、寛政2年（1790）以降に見られるという「焼墨ぎ技法」が認められる。

陶器・食卓鉢類（第11図、図版5）

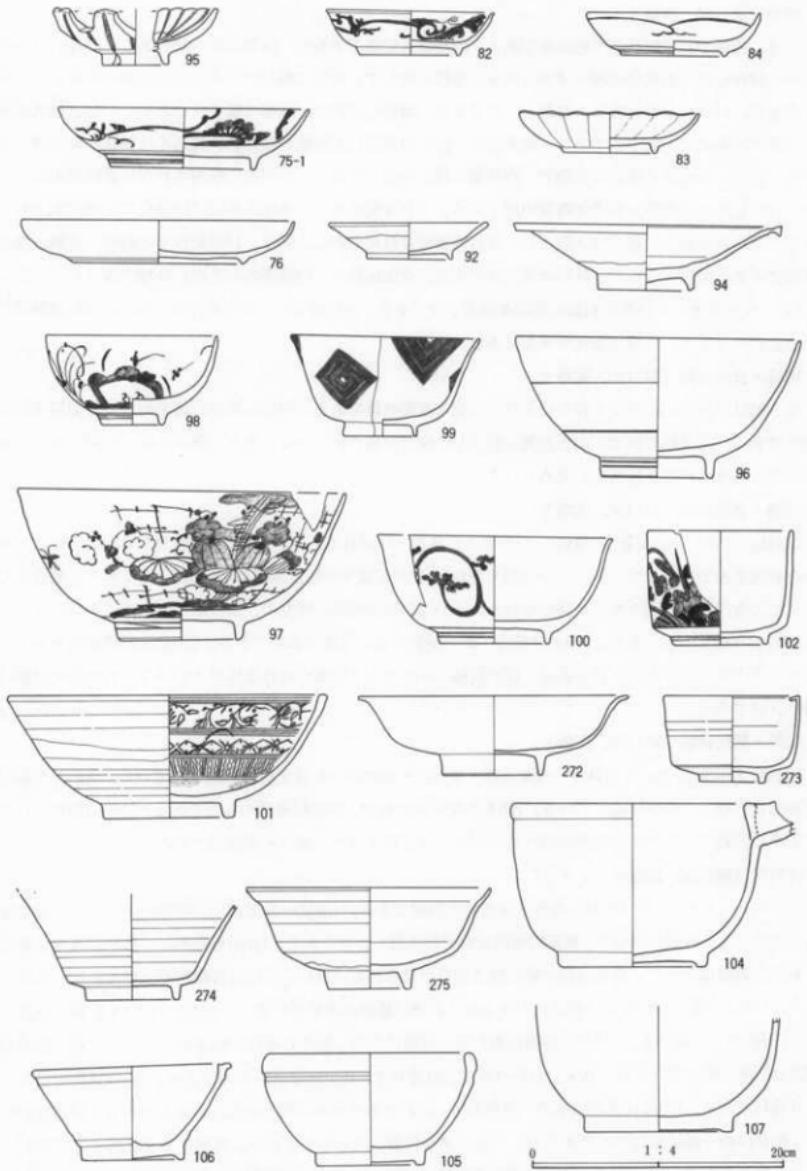
101は18世紀代の肥前産の大鉢で、いわゆる三島手と呼ばれるものである。内面の体部には、唐草文と緑線を白泥象嵌で施している。272・273・274は、17世紀後半の肥前産である。272は端反形で、高台内に工具による円圧と刻印「柴」が認められる。273・274は京焼風の作りで、共に高台内中央に工具による円圧が施工されている。また、273には刻印「新」が見られ、用途は香炉である。275は、17世紀後半から18世紀前半の肥前産である。見込みは、蛇の目釉ハギである。内面から外面体部にかけて、青緑釉と鉄釉の掛け分けである。

陶器・調理鉢類（第11図、図版6）

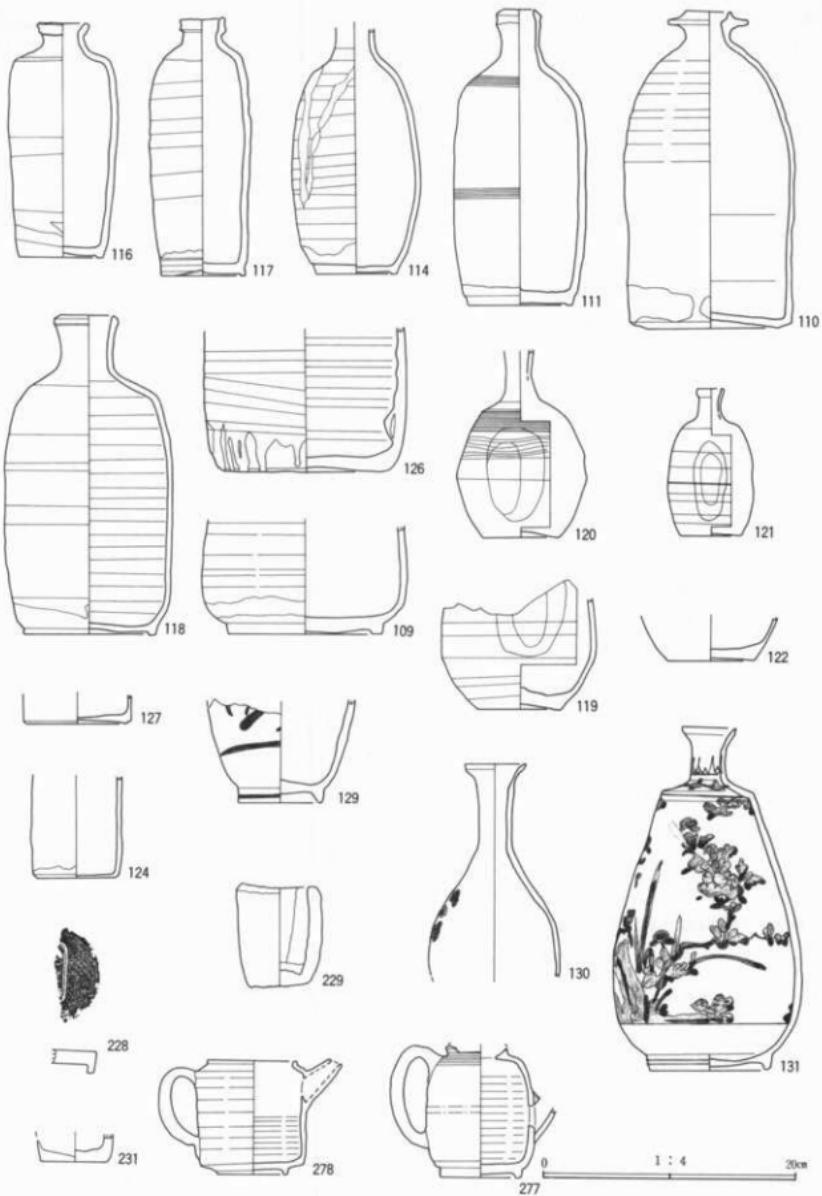
104は、18世紀前半の片口鉢で、内面体部上半から外面体部にかけて灰釉が施されている。見込みと高台部周囲は無釉で、煤が付着している。106も小型の片口鉢で、19世紀後半のものである。105・107は、19世紀前半の捏鉢で、内外面に灰釉が施されている。以上はすべて、瀬戸・美濃産である。

徳利類（第12図、図版6・7・8）

109~114・116~121・124は、瀬戸・美濃産の陶器である。109は一升徳利で、17世紀末から18世紀初頭のものである。外面は白釉で、底部の周囲に釉の拭き取りが見られる。110は船徳利で、17世紀後半のものである。外面は鉄釉で、底部周囲に釉の拭き取りが見られる。111~114は五合徳利で、18世紀代のものである。112は「介」の釘書き（線刻）が見られ、内面に鉄分が多量に付着していた。113にも釘書きが見られ、「川司屋」と読める。114は、外面灰釉の後、肩部にうのふ釉流し掛けが施されている。また、底部の周囲は、釉の拭き取りが見られる。116・117は三合徳利で、18世紀後半のものである。118は18世紀後半の一升徳利である。119は19世紀前半の一升徳利で、いわゆるベコカン形と呼ばれるものである。外面は鉄釉で、割れ口の一部に敲打痕が認められ、内面に灰が付着していることから、体部下半を灰落としに再利用したと考えられる。124は19世紀前半の燭徳利である。122・123は18世紀前半の備前産で、無釉焼き締めである。122の底部外面には刻印が見られる。126は18世紀代の一升徳利（吉右衛門徳利）で、志戸呂産である。



第11図 SD-001出土遺物(2) 碗類・鉢類実測図



第12図 SD-001出土遺物(3) 德利類・調理用具類実測図

る。外面は鉛釉である。127は19世紀前半の燭徳利で、京焼である。131は、17世紀末から18世紀初頭の徳利形花器である。材質は磁器で、肥前産である。文様は、外面口縁部は鋸歯文、肩部は七宝文、体部は草花文である。

調理用具類（第12図、図版6）

225・228・229・230・231は焼塩壺で、材質は土器である。225はロクロ成形で、胎土は薄桃色である。228は焼塩壺の蓋で、18世紀前半の関西系のものである。外面天井部に、二重枠を持つ刻印が見られるが、判読不能である。229は18世紀後半の関西系のものである。板巻き成形で、内面に布目痕があり、胎土に雲母を小量含む。231は19世紀前半の在地産のものである。ロクロ成形で、底部に回転糸切り痕が見られる。276～278は水差で、18世紀代の瀬戸・美濃産である。

陶器・煮炊具類（第13図、図版6）

174・175は、19世紀前半の行平鍋で、生産地は不明である。174は、貼付けによる注口があり、外面体部に回転トビガナ痕が見られる。内外面の注口部周囲と体部下半は鉄釉で、外面体部は無釉である。175は、外面体部に回転トビガナ痕が見られる。内外面体部下半は鉄釉、外面体部は無釉である。なお、外面底部には煤が付着している。176・177・181・182は、18世紀後半の土鍋で、瀬戸・美濃産である。176は、外面体部は鉄釉で、外面底部は無釉で煤が付着している。177は把手部のみ残存で、クランク状に屈曲し、内外面鉄釉である。181・182の把手は弓状で、内面から外面体部にかけて鉄釉が施されている。178・179は18世紀後半の土瓶である。178の器形は算盤玉形で、把手の形状は山形である。内外面鉄釉で、外面体部上半には灰釉の流し掛けが見られる。生産地は、瀬戸・美濃である。179は京焼で、器形は178と同じである。内外面灰釉で、外面底部に煤が付着している。180は肥前産の散蓮華で、19世紀のものである。型打ち成形で、内外面に雲気文の染付が施されている。

土器・煮炊具類（第13図、図版6）

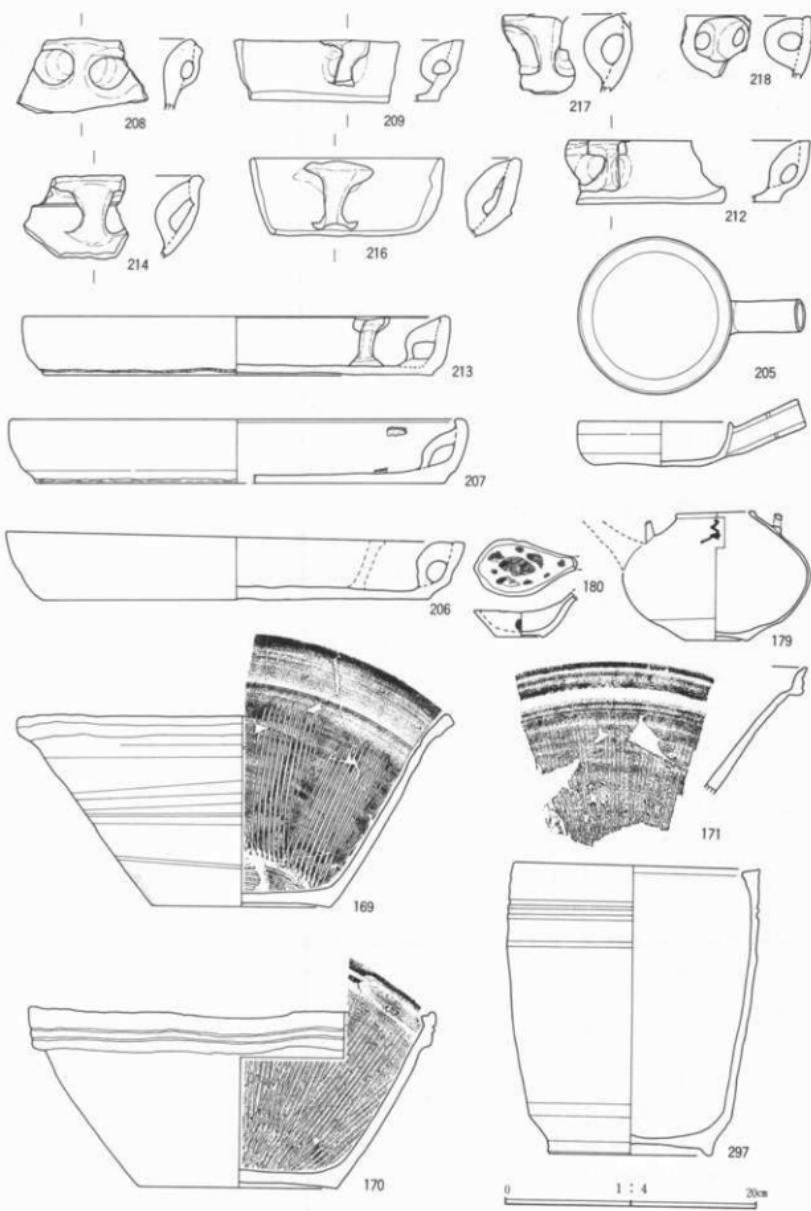
205～218は焙烙で、すべて在地土器である。205は19世紀前半のもので、把手を持ち、外面底部以外は透明釉が掛かっている。把手には目釘穴があることから、木製の把手が付けられていたと思われる。用途は、ゴマ等を炒めるための道具（炒り鍋）と考えられる。本遺跡からは、同器形で無釉のタイプも出土している。なお、佐倉城跡からも同器種のものが出土しているが、江戸市中からの出土例は聞かない。206～218は18世紀代のもので、すべて内耳形の焙烙である。焙烙については、把手の付け方で6形態（A～F）、口縁部の形態で8形態（a～h）に分類し¹⁰、第2表で特徴を整理したので、ここでの詳述は省略する。

陶器・調理鉢類（第13図、図版6）

169～171は、陶器（炻器）の擂鉢である。169は瀬戸・美濃産で、18世紀のものである。170は堺産で、18世紀のものである。注口部には、「長上」の刻印が見られる。171は丹波産で、17世紀末から18世紀のものである。

甕類（第13図・第14図、図版6・8）

226は常滑産で、16世紀のものである。口縁部はN字状である。227是在地土器で、胎土に多量の雲母と石英を含む。296は常滑産で、18世紀のものである。口縁部断面は、T字状である。297は瀬戸・美濃産の半胴甕で、18世紀後半から19世紀前半のものである。内面から外面体部にかけて鉄釉である。底部に穿孔はなく、植木鉢への転用は見られない。338は瀬戸・美濃産の水甕で、19世紀前半のものである。外面体部に鉛と刺突文で曲線文を描いている。内面から外面体部に灰釉を施した後、外面に綠釉と鉄釉を流し掛け



第13図 SD-001出土遺物(4) 煮炊具類・調理鉢類実測図

ている。高台内には墨書きが見られる。

灯火具類（第14図、図版7）

183・184は把手の付く台付き乗燭で、19世紀前半の志戸呂産の陶器である。上皿内面以外は、鉄軸が施されている。上皿には、燈芯を掛ける耳が付き、受皿には、穴が2箇所あいている。185は瀬戸・美濃産の油徳利で、18世紀代のものである。外面は鉄軸で、把手は欠損している。186は瀬戸・美濃産の乗燭で、18世紀後半のものである。皿の中央に燈芯を立てる柱があり、それにはスリットが入っている。底部には穿孔があり、下半部以外は鉄軸が施されている。187～193は瀬戸・美濃産の灯明受皿で、18世紀後半のものである。受部の切り込みは箱形で、全面鉄軸が施されている。194～198は、瀬戸・美濃産の灯明皿で、194～196が18世紀後半、197・198は17世紀代のものである。199・200は信楽産の灯明受け皿で、19世紀代のものである。胎土は乳白色で、受部の切り込みは、U字状である。内面から外面体部まで透明の灰釉で、外面底部は無釉である。201～203は志戸呂産である。201・203は灯明受皿で、受部に穿孔が見られ、全面鉄軸が施されている。202は灯明皿で、全面鉄軸が施されている。共に、17世紀末から18世紀前半のものである。204は在地土器の瓦灯皿で18世紀のものである。外面体部には煤が付着している。282是在地土器のろうそく形乗燭で、底部に穿孔が見られる。

暖房具類・調理用具類（第14図、図版7）

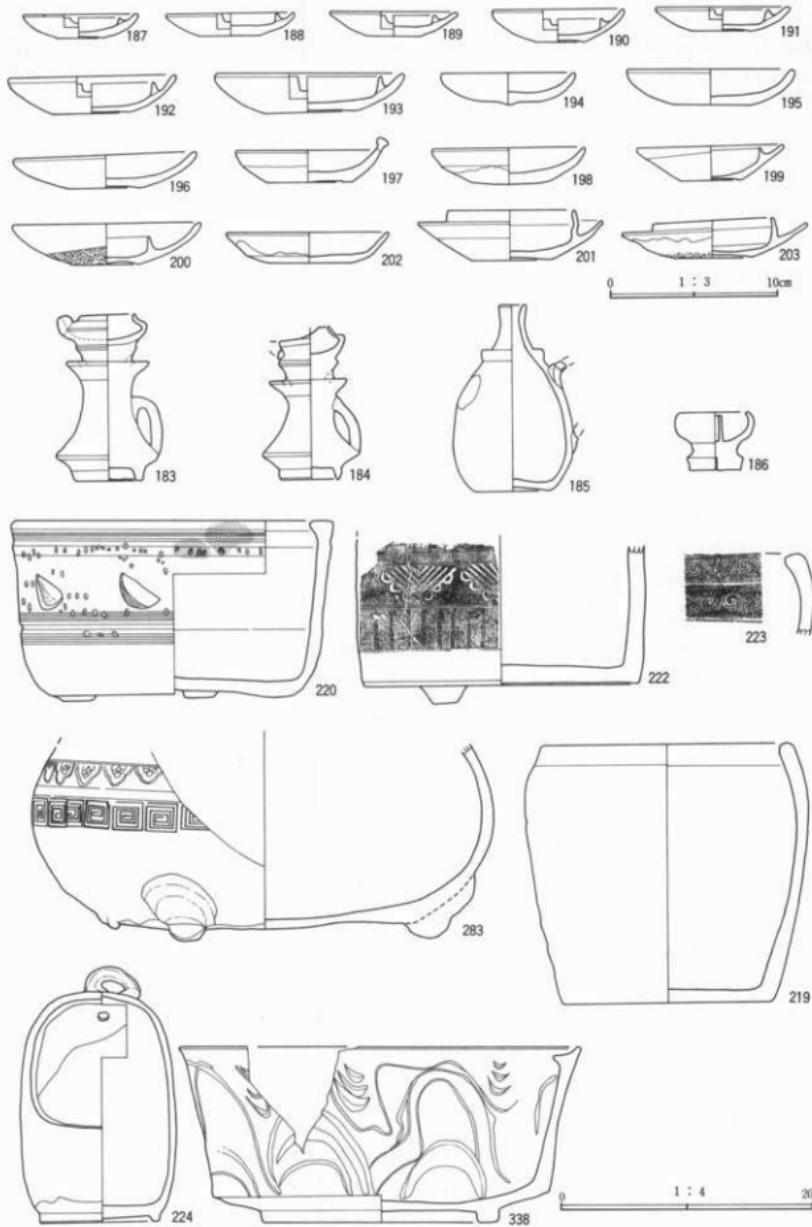
219是在地土器の火消壺である。外面体部に剥落部分が数多く見られる。220・221是在地土器の火鉢で、18世紀代のものである。220は、外面体部に横位の沈線の区画があり、その中に半月形の割りと刺突文が施されている。また、口縁部外面の沈線部分に、漆と思われるものがわずかに付着している。222・223是在地瓦質土器の火鉢で、18世紀後半から19世紀前半のものである。224は手あぶりもしくは火もらいで、19世紀前半の瀬戸・美濃産である。外面は鉄軸、内面と高台部周囲は無釉である。283は瀬戸・美濃産の陶器火鉢で、18世紀後半のものである。瓶掛で、3足貼付けの内2足が残存している。外面体部に草文と雷文の押印文が見られる。内面は、雑な鉄軸、外面は綠釉が施されている。294・295是在地土器の電敷輪（釜羽）である。19世紀後半のもので、内外面に煤が付着している。

蓋類（図版7）

232は瀬戸・美濃産の陶器で、内面に鉄分が付着している。234は肥前産の磁器である。235は蓋物の蓋で、肥前産の磁器である。把手は欠損している。236は土瓶の蓋である。京焼の陶器で、18世紀後半のものである。237は壺の蓋で、志戸呂産陶器である。238は水注の蓋で、18世紀後半の京焼である。

煙草道具類・化粧道具類・文具類・ミニチュア類（第15図、図版7）

144是在地瓦質土器の灰落として、19世紀前半のものである。外面体部に回転押印文が見られる。口唇部は煙管による敲打痕により、原形を留めていない。291是在地土器の火入れで、19世紀前半のものである。161は鬃油壺で、18世紀前半の肥前産磁器である。154・156はお歯黒壺で、18世紀代の瀬戸・美濃産陶器である。共に二耳壺で、内面と高台部に鉄分が付着している。155は仏花器で、17世紀末の瀬戸・美濃産であるが、内面に鉄分が多量に付着していることから、お歯黒壺に転用されたと考えられる。149～151・349は水滴である。149は肥前産の磁器、150・151・349は瀬戸・美濃産の陶器で、共に形打成形である。349は大黒天で、底部外面に墨書きが見られる。水滴はすべて19世紀前半のものである。157は飼猪口で、19世紀前半の瀬戸・美濃産である。外面底部に記号のような墨書きが見られる。133・152・153は、ミニチュアである。153是非在地産の陶器で、天目台のミニチュアである。時期は、17世紀末から18世紀初頭である。173は焰



第14図 SD-001出土遺物(5) 灯火具類・暖房具類・貯蔵具類実測図

硝摺で、17世紀代の陶器で、生産地は瀬戸・美濃である。162～164は在地土器製の基石である。19世紀代のもので、指頭による押圧痕が見られる。165・166は土人形（裸人形）の顔の部分である。167・168は泥めんこである。289・290は小杯で、紅皿に使用されたものと考えられる。18世紀後半の肥前産磁器で、外面部に色絵の羽つき文が見られる。

神仏具類（第12・15図、図版6・7）

128・134～138は、神酒器で、肥前産の磁器である。132は仏花器である。肥前産の磁器で、18世紀前半のものである。139～141は仏飯器である。139・141は肥前産の磁器で、18世紀のものである。140は瀬戸・美濃産の陶器である。142・143は香炉で、瀬戸・美濃産の陶器である。142は18世紀前半のもので、143は17世紀後半のものである。共に、口縁部に煙管による敲打痕が見られ、灰落としに転用されたと思われる。287・288は在地土器のかわらけで、18世紀中葉から後葉のものである。ロクロ水挽き成形で、底部に回転糸切り痕が見られる。287の口縁部内面に、暗赤褐色の付着物が見られる。なお、江戸市中でのかわらけの用途は、多分に灯明皿であると聞くが、本遺跡のかわらけを観察する限り、煤が付着したものは1点のみである。160は数珠玉である。材質は土器か石質か不明である。内面は白色で、外面は薄桃色の顔料が塗布されていると思われる。

イ 瓦（第15図、図版7）

S D-001から、破片総数にして788点出土した。破片数の内訳は、軒丸瓦9点、軒棟瓦9点、丸瓦58点、軒平瓦1点、平瓦85点、鬼瓦4点、不明622点である。

軒丸瓦（246・247）は、共に丸部の径が16.8cmで、左巻きの三巴文の周りに珠文を16個あしらっている。両者の違いは、246には圓線があり、珠文・三巴文ともに小振りであることである。また、外輪の幅も246の方が狭い。時期は、共に17世紀から19世紀のものである。なお、両者とも、人為的に破碎した痕跡があり、内面に多量の煤が付着して被熱していることから判断して、竈又は炭焼き窯の煙道等に二次使用されたと考えられる。

248～253は軒棟瓦である。248は三巴文で18世紀から19世紀、251は三巴文と珠文8個をもち、18世紀後半のものと考える。249・250・252・253は平部で、丸部と接合するものはなかったが、三巴文と唐草文の組合せであろう。249は江戸式の唐草文（陽刻）で、18世紀から19世紀のものである。250も同様の文様で、18世紀後半のものである。252・253は東海系の瓦で、中心飾りが大きく18世紀後半のものである。共に、 \ominus の刻印をもつ。252は二次的な被熱と剥落が見られ、煤も付着している。254・255は丸瓦である。254は、裏側に沈線が2本施され、255は、沈線がなく被熱して燈色化している。256～258は鬼瓦の部分片であり、17世紀～19世紀のものである。

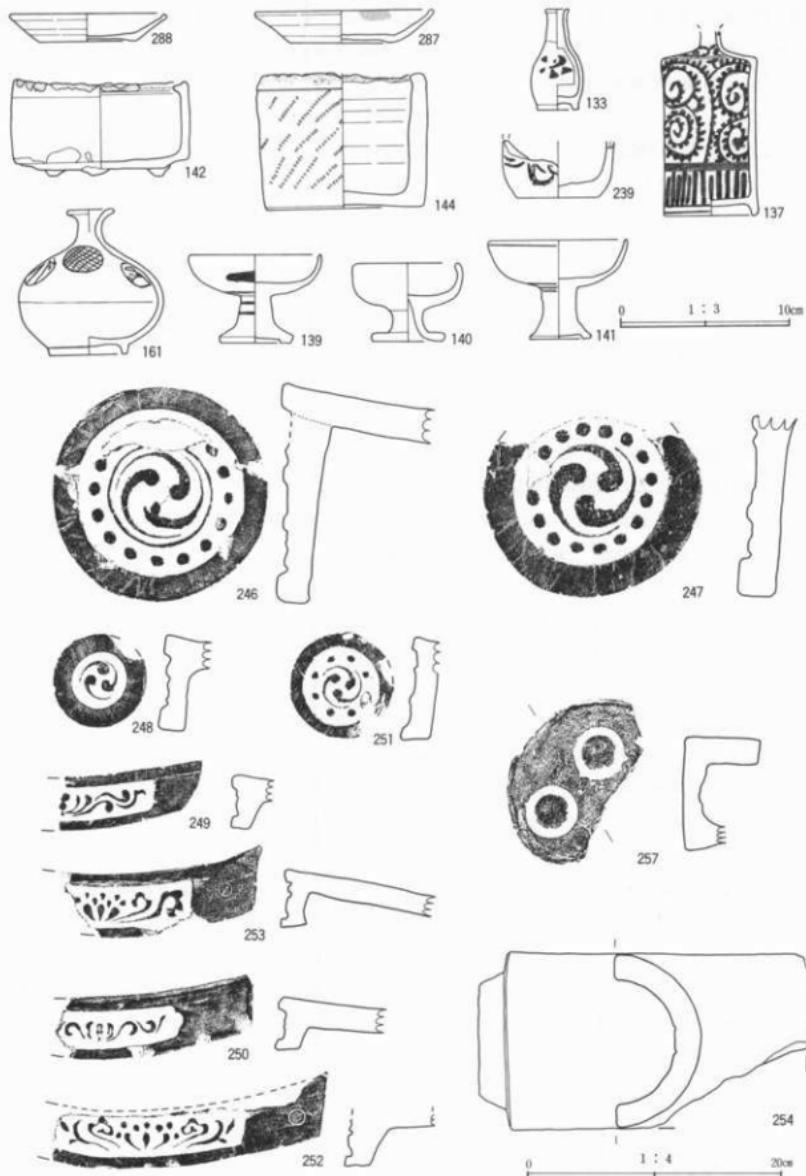
S D-002の覆土（宝永テフラより下部）からも、軒丸瓦と瓦釘が出土している。

なお、佐倉城跡の調査においても、多数の瓦が出土しており、今後の比較検討資料となろう。

ウ 鉄製品（第17・18図、図版8、第5表）

S D-001から、鉄釘（350・351・352）・楔（361）が出土している。鉄釘はすべて角釘で、瓦釘に使用されたものと思われる。その他、釣手、把手、和金具等の住居・建具金具類が出土している。

S D-003からは、刀2振（381・382）と多量の鉄釘（357・358・359）が出土した。381は、全長527mm、重量410gで、切先をわずかに欠損しているのみである。表面全体は腐食しているが、重量感があるので、内部の状態も良好と思われる。堀跡の覆土内からの出土であるが、付近に近代のゴミ穴と盛土が認め



第15図 SD-001出土遺物(6) 神仏具類・ミニチュア・瓦実測図

られることから、時期決定は難しい。382も茎部の一部を欠損しているほかは、残存状態が良好である。381より反りが少なく、直刀的である。刀身の両面中央に凹条の影溝があること、目釘穴が3か所あり、その一つに極細の針金と木質部が付着していること、茎部が波状になっていることが特徴として挙げられる。これも、別のゴミ穴のすぐ脇から出土しており、近代の銃剣の可能性がある。

なお、2点ともX線撮影を行ったが、銘は確認できなかった。

SD-003の土層面下部から鉄釘が48本まとめて出土した(357・358・359)。ちょうど、土層面にかかり、箱状をなしていた。また、その下部に青白色粘土が込められていた。釘の形状は頭の部分がL字状に曲がり、長さもほぼ115mm平均で、木質部を付着させたまま出土した。出土状態からみて、井戸枠の釘の可能性を考えられよう。

エ 銅製品(図17、図版8、第5表)

SD-001から煙管の雁首(158・354・355)と小柄(356)が出土している。158は火皿を伴うが、354・355は欠損している。158は羅字口が太く1本の沈線が見られる。3点とも、18世紀から19世紀のものである。353は十能の一部である。

オ 錢貨(第17図、図版8、第4表)

SD-0011から出土した錢貨は合計18点で、寛永通宝10点、文久永宝1点、不明7点である。寛永通宝はすべて新寛永錢で、銅錢が10点(363・364・365・366・367・368・369・370・371・374)、鐵錢が5点(376・377・378・379・380)である。375は、4枚が癒着している。

363・364は文錢で寛文8年(1668)～天和3年(1683)の鋳造、366・367・368は四文錢で明和5年(1768)～天明8年(1788)の鋳造である。374は文久永宝で文久3年(1863)の四文通用錢である。

SK-001からは、永楽通宝(銅錢)が1点出土した(362)。天正15年(1587)ころの鋳造と思われる。

カ 石製品(第16図、図版7、第3表)

263・264は石臼である。263は下臼、264は上臼であるが、共に破損している。また軸、磨耗が激しく主溝・副溝はわずかに残るのみである。なお、264は被熱している。

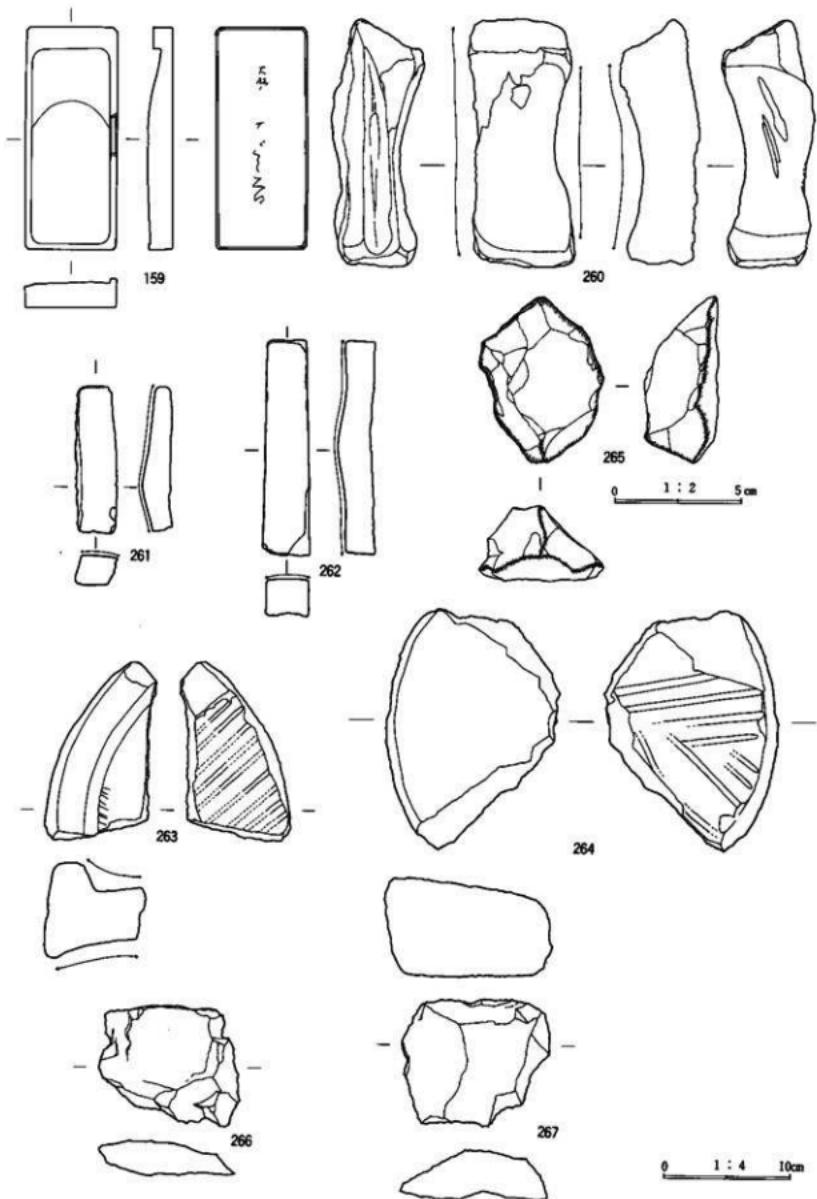
266・267は安山岩質の砾であり、総数にして124点出土した。円砾を人為的に剥離した痕跡があり、一部に自然面を残す。形態と大きさがほぼ統一されており、佐倉市内の武家屋敷跡の柱穴から出土する栗石に近似している。

159は粘板岩製の硯である。ヨコブチの一部を欠損しているほかは完形に近い。硯背に線刻銘が施されているが判読不明である。硯は、22個体出土しており、一部、ヨコブチを故意に打ち欠いてから磁石に転用しているもの、オカ部分がウミに向かってU字状に著しくすり減っているものが見られる。また、被熱して薄桃色に変色しているものもある。260・261・262は砥石である。260は砂岩製で、湾曲したすり減り痕が二面、細長くすり減った溝が二面見られる。261・262は、流紋岩製で、波状にすり減っている。砥石は、破片数で44点出土しており、流紋岩製が主体である。

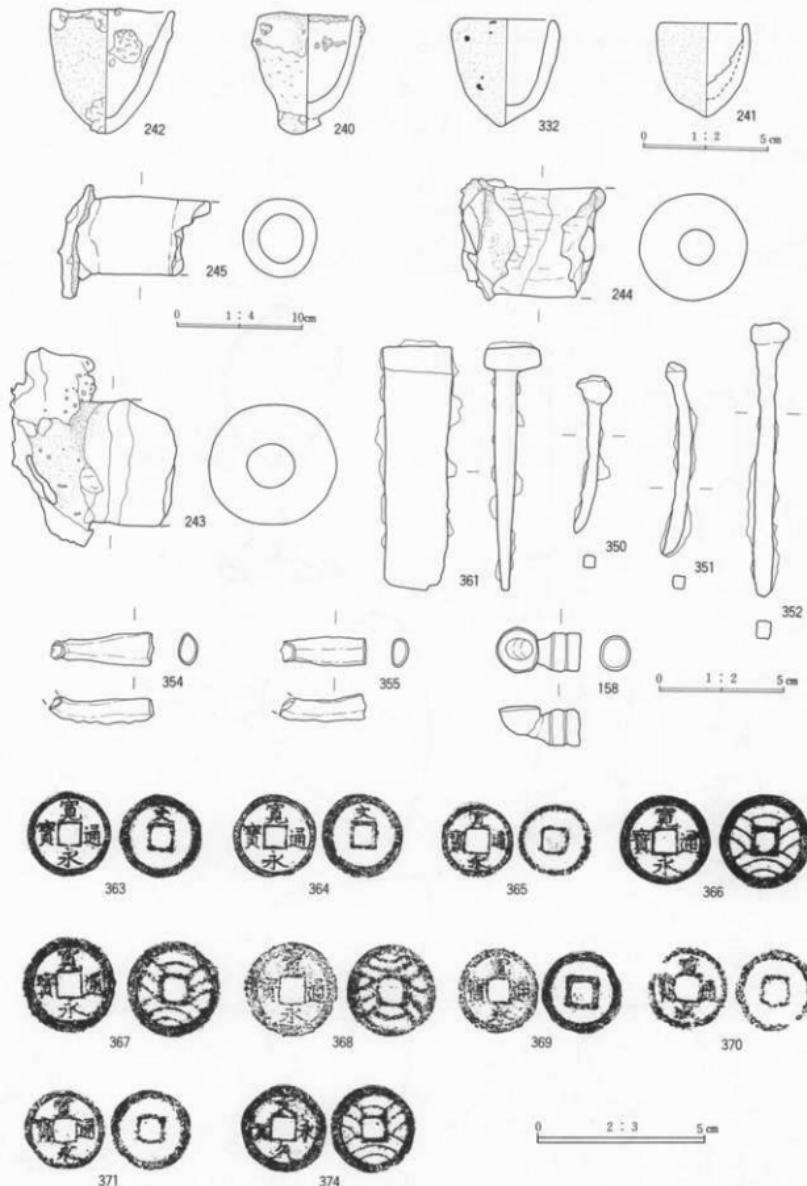
265は、メノウ製の火打石である。鋭角な稜線のすべてに火打ち金の使用痕が見られる。火打石の出土はこれ1点のみである。

キ 鍛冶具類(第17図、図版7)

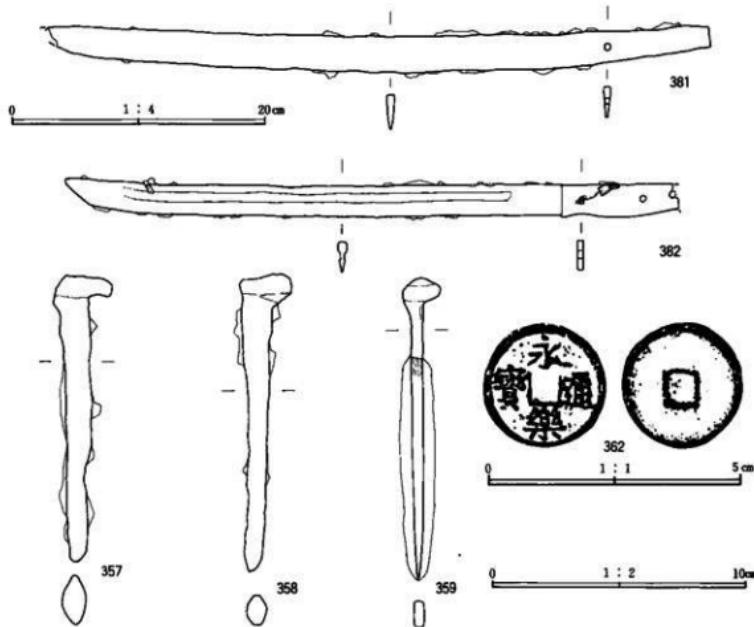
240・241・242・332は坩堝である。陶器(熔器)で、個体数にして、14点出土した。形状は砲弾形で、内外面に金属の溶解物が付着しているものが多い。



第16図 SD-001出土遺物(7) 石製品実測図



第17図 SD-001出土遺物(8) 錫冶具類、鐵・銅製品、錢貨実測図



第18図 SD-003、SK-001 出土遺物実測図

243～245は、羽口である。総数で160点出土しているが、口径の大きさで大型(100mm前後)、中型(85mm前後)、小型(60mm前後)に分類でき、大型が過半数を占める。羽口の材質は、土器である。383・384は鉄滓(椀形滓)である。鉄滓は、総重量にして、約500kg出土した。

注1 藤尾慎一郎 1991「佐倉と江戸—近世の瓦質・土師質土器からみた地域性—」『国立歴史民俗博物館研究報告 第36集』 国立歴史民俗博物館 を参考にし、把手の付け方で形態Fを、口縁部の様子で形態g・hを追加した。以下は、その説明である。

- ・形態Fは、口縁部上端から体部中位以上に粘土塊を貼り付けたもの。耳は、小さいが太く、いわゆる豚鼻状である。
- ・形態gは、内外面が半球状に丸みを帯びるもの、形態hは、T字状に内外面に開くものである。

第1表 SD-001出土焼物組成表 () は個体数

第2表 SD-001出土焼物観察表 ()は推定値

測定番号	測定番号	測定番号	材質	器種	生産年(西)	年代	口径	縦高	横高	底色	指揮	特徴(成形・技法・模様・文様・軸・土色・使用感等)
10	5	1	磁器	端反版側	窯戸・美濃	19c 中頃	11.0	5.8	4.0	白色	80	端反形、染付、内面口縁部太圓筒文、見込み縁部内に花文、外周体部花文、端反形、染付、内面口縁部太圓筒文、見込み縁部内に「寿」の文字、外周体部区画線竹葉文。
10	5	2	磁器	端反版側	窯戸・美濃	19c 中頃	10.5	5.6	3.8	白色	90	端反形、染付、内面口縁部太圓筒文、見込み縁部内に「寿」の文字、外周体部区画線竹葉文。
10	5	3	磁器	端反版側	窯戸・美濃	19c 中頃	10.6	6.0	3.7	白色	100	端反形、染付、内面口縁部連續状の文様等、見込み縁部内に「寿」の文字、外周体部花文等。
10	5	4	磁器	端反版側	肥前	18c 前半	11.2	6.3	4.5	白色	85	染付、外周体部花文、高台内圓筒。
10	5	5	陶器	側	肥前	17c末 ~18c初頭	[11.6]	7.8	5.2	暗灰色	50	陶胎染付、外周体部花文草、底色は灰色。
10	5	6	陶器	側	窯戸・美濃	18c 前半	[10.6]	8.0	5.0	黄褐色	50	銀削鉢、内面軽度外反軸と供輪の掛け分け。
10	5	7	陶器	側	窯戸・美濃	18c 前半	8.0	5.1	3.8	暗褐色	100	内面軽度、外周軽度と供輪の掛け分け。
10	5	10	磁器	小把柄	窯戸・美濃	19c 後半	[9.0]	5.5	4.0	白色	65	端反形、染付、内面口縁部太圓筒文、見込み縁部内に花文か、外周体部花文。
-	5	11	磁器	端反版側	窯戸・美濃	19c 中頃	9.2	4.8	4.0	白色	90	端反形、染付、内面口縁部太圓筒文、見込み縁部内に花文?、外周体部花文。
5	13	磁器	斜吹側	小形側	窯戸・美濃	19c 後半	7.4	6.1	3.5	白色	100	染付、外周体部花文と識文。
5	14	陶器	側	窯戸・美濃	18c 後半	9.1	5.0	3.7	黄褐色	100	端反形、全面銀削石目(底部のみ具削)。	
10	5	18	陶器	半圆形小瓶	窯戸・美濃	18c 前半	7.5	6.2	3.6	灰白色	90	陶胎染付、内面口縁部圓筒、見込み五弁花、外周体部斜糸文の地に桜花文、美台部内に圓筒。
10	5	20	陶器	天日茶碗	窯戸・美濃	17c 後半	-	-	-	暗灰色	100	内面軽度。
10	5	21	磁器	半圆形小瓶	窯戸・美濃	18c 後半	8.0	6.7	3.9	灰白色	50	染付、見込み縁部内に五弁花(コンニャク)、外周体部花文、高台部外周に圓筒文。
10	5	22	磁器	広東調	肥前	18c 前半 ~19c 初頭	[11.7]	5.9	6.2	白色	70	染付、外周体部花文。
-	5	23	磁器	広東調	肥前	18c 前半 ~19c 初頭	[11.4]	6.9	7.0	白色	40	染付、内面口縁部圓筒文、見込み太身状の文様、外周体部斜糸文。
-	5	24	磁器	広東調	肥前	18c 前半 ~19c 初頭	[11.2]	6.0	-	白色	20	染付、内面口縁部圓筒文、見込み縁部内に文様あり、外周体部草葉文。
10	5	25	磁器	広東調	肥前	18c 前半 ~19c 初頭	[10.0]	5.9	4.7	白色	100	染付、内面口縁部圓筒文、見込み縁部内に龜文、外周体部龜文。
-	5	26-1	磁器	端反版側	肥前	19c 前半	10.4	6.1	4.3	白色	100	端反形、染付、内面口縁部太圓筒に摩擦文、見込み縁部内に五弁花文。
-	5	26-2	磁器	端反	肥前	19c 前半	9.3	3.0	4.1	白色	100	端反形、染付、内面口縁部太圓筒に摩擦文、見込み縁部内に五弁花文。
-	5	27	磁器	小杯	肥前	17c 前 ~18c 初頭	[7.6]	5.6	3.2	白色	60	端反形、染付、外周体部紅葉文。
10	5	28	磁器	小杯	肥前	19c 前半	[7.0]	3.4	-	暗灰色	45	端反形、染付、外周体部復文。
-	5	29	磁器	小杯	肥前	19c 前半	6.6	2.6	3.0	天白	90	染付、外周体部新格子文。
-	5	31	磁器	半圆形小瓶	肥前	18c 後半	8.0	6.4	3.8	白色	100	染付、内面口縁部四方雲文、見込み縁部内に草状竹葉文、外周体部タコ草文、高台部外周に圓筒。
10	5	32	磁器	半圆形小瓶	肥前	18c 後半	7.7	6.5	3.8	白色	60	染付、内面口縁部四方雲文、見込み縁部内に五弁花文。外周体部新格子文の地に草文、高台部外周に圓筒。
10	5	33	磁器	半圆形小瓶	肥前	18c 後半	7.7	6.4	4.1	白色	95	青釉染付、内面口縁部四方雲文、見込み縁部内に五弁花文。外周体部青釉。
-	5	34	磁器	半圆形小瓶	肥前	18c 後半	6.0	5.4	3.9	白色	85	染付、内面口縁部四方雲文、見込み縁部内に五弁花文(コンニャク)。外周体部新格子文と手写文、高台部外周に圓筒。
-	5	35	磁器	半圆形小瓶	肥前	18c 後半	7.2	5.5	3.7	白色	100	染付、内面口縁部圓筒文、見込み縁部内に虫文。外周体部新格子文と斜綱。
10	5	36	磁器	荷葉口	肥前	18c 後半	8.9	6.0	5.9	白色	100	染付、内面口縁部荷葉口方雲文、見込み縁部内に五弁花文(コンニャク)。外周体部新格子文と手写文、高台部外周に圓筒。
-	5	38	磁器	小杯	肥前	19c 前半	6.6	4.4	3.2	白色	100	染付、外周体部文。
-	5	39	磁器	小杯	肥前	1650年代	-	-	(4.2)	赤褐色	5	高台削輪、軸生揚げ。
10	5	40	磁器	側	肥前	17c 後半 ~18c 初頭	-	6.6	4.4	白色	25	染付、外周体部一重網目文。
-	5	41	磁器	側	肥前	17c 前 ~18c 初頭	-	(4.5)	白色	25	染付、外周体部草花文(籠紙彫)。	
10	5	42	磁器	小形側	肥前	18c 前半 ~19c 初頭	-	4.2	(3.0)	灰褐色	25	染付、内面体部一重網目文、見込み縁部内に花文。外周体部二重網目文。
10	5	43	磁器	側	肥前	18c 前半	9.0	6.4	3.6	白色	100	染付、外周体部千菊文と梅花文。
10	5	44	磁器	側	肥前	18c 前半 ~19c 初頭	[10.0]	5.1	4.2	暗灰色	95	染付、外周体部二重網目文。
10	5	45	磁器	側	肥前	18c 前半	11.4	6.1	4.7	白色	90	染付、内面口縁部四方雲文、見込み縁部内に草状竹葉文。外周体部二方削松竹梅文。
-	5	46	磁器	側	肥前	19c 前半	10.6	6.1	4.0	白色	95	端反形、染付、内面口縁部太圓筒文、見込み縁部外竹葉文。外周体部花文。
10	5	47	磁器	側	肥前	18c 前半	10.8	6.3	4.4	白色	90	染付、外周体部かけ織に草花文、高台内圓筒内に「大明年製」款。
10	5	48	磁器	側	肥前	18c 前半	(8.0)	6.1	4.5	白色	50	染付、外周体部草花文。
-	5	49	磁器	側	肥前	18c 前半	9.8	4.6	4.0	白色	100	染付、外周体部草花文。
-	5	50	磁器	小形側	肥前	18c 前半 ~19c 初頭	8.1	4.4	3.7	白色	95	端反形、染付、外周体部山水題文。
-	5	51	磁器	側	肥前	18c 前半	9.1	5.4	3.6	白色	80	染付、内面口縁部圓筒文、見込み縁部内に五弁花文。外周体部斜糸文の地に半周文。
-	5	52	磁器	小形側	肥前	17c 前 ~18c 初頭	8.3	4.6	3.5	暗灰色	75	染付、外周体部紅葉文(コンニャク)、底土灰。

測定番号	測定番号	古文書名	材質	器種	生産地(都)	年代	口径	器高	底径	胎土色	表面質	特徴(形態・技法、刷毛、文様、施釉、施土、使用痕等)
10	5	53	追跡	小鉢	肥前	17c後半 ~18c初期	9.2	4.2	3.5	白色	55	色鉢。内面全体刷毛文(赤色)。
-	5	54	追跡	小鉢	肥前	18c	7.3	3.4	3.1	白色	75	白鉢。
10	5	55	追跡	小広口鉢	肥前	18c 後半 (16.4)	5.3	3.8	白色	35	乗付。外側変形文字文。	
10	5	58	陶器	碗	肥前	17c末半 ~18c初半	(16.4)	5.3	3.9	暗赤褐色	65	内外面白滑による刷毛目文(模様文)。
-	5	59	陶器	碗	肥前	17c末半 ~18c初半	(16.0)	6.2	(4.4)	暗赤褐色	45	内外面白滑による刷毛目文(模様文)。
-	5	60	陶器	碗	肥前	17c 後半 (16.2)	6.3	3.8	黄灰色	50	鳥足手鉢。全面灰釉(黄灰色)。	
10	5	61	陶器	碗	肥前	17c 後半 (16.6)	7.0	5.1	黄灰色	50	鳥足手鉢。全面灰釉(黄灰色)。	
10	5	62	陶器	碗	京・備前	18c 後半 (9.0)	5.2	3.7	暗褐色	50	端反形。内面白化現象の後、全面灰釉(透明)。	
-	5	63	陶器	碗	京・備前	18c 後半 (9.4)	-	-	灰色	15	半球鉢。色鉢。外側全体半刷毛文(赤・黒色)。全面灰釉(透明)。	
-	5	64	陶器	碗	京・備前	18c 後半	-	-	3.6	灰白色	30	若狭鉢。内面から外側全体灰釉(透明)。高台部周縁無釉。
10	5	65	陶器	碗	京・備前	18c 後半	9.7	5.5	3.4	黄白色	100	半球鉢。外側全体に赤で草文。内面から外側全体灰釉(透明)。高台部周縁無釉。
10	5	66	陶器	碗	京・備前	18c 後半 (10.6)	6.1	3.8	黄白色	60	若狭鉢。外側全体に赤で若松文。内面から外側全体灰釉(透明)。高台部周縁無釉。	
-	5	67	陶器	碗	京・備前	18c 後半 (9.0)	5.4	3.1	灰白色	25	半球鉢。外側全体刷毛文(赤・黒色)。内面から外側全体灰釉(透明)。高台部周縁無釉。	
10	5	68	陶器	碗	京・備前	18c 後半	9.4	5.3	3.5	黄白色	50	半球鉢。外側全体草花文(赤・緑色)。内面から外側全体灰釉(透明)。高台部周縁無釉。
-	5+8	69	陶器	碗	肥前	17c 後半	-	-	5.4	黄白色	30	京焼風。内面から外側全体灰釉(透明)。高台部周縁無釉。高台中央部に工具による印捺。高台内「山往住」の跡印。
-	5	70-1	追跡	半筒形小鉢	肥前	18c 後半	8.4	6.8	-	白色	40	乗付。内面口縁部方寸縁文。見込み縫隙内に五舟花文(コンニャク判)。外側全体草花文。高台部周縁無釉。五舟花文(コンニャク判)。内面口縁部方寸縁文。見込み縫隙内に「山往住」の跡印。
-	5+8	70-2	陶器	碗	肥前	17c 後半	-	-	-	黄灰色	40	京焼風。内面から外側全体灰釉(透明)。高台部周縁無釉。高台中央部に工具による印捺。高台内「山往住」の跡印。
-	5+8	71	陶器	碗	肥前	17c 後半	-	-	4.9	黄白色	40	京焼風。内面から外側全体灰釉(透明)。高台部周縁無釉。高台中央部に工具による印捺。高台内「山往住」の跡印。
-	5+8	72	陶器	碗	肥前	17c 後半	-	-	-	黄白色	40	京焼風。内面から外側全体灰釉(透明)。高台部周縁無釉。高台内「山往住」の跡印。
-	5	73	磁器	碗	肥前	18c 前半	-	-	(4.4)	白色	40	色鉢。外側全体双方釋文の内に密拭(眞赤・赤色)。高台内縫隙内に既あり。
-	5	74	磁器	碗	肥前	18c	-	-	-	白色	40	色鉢。外側全体草花文(赤・緑・黒色)。
11	5	75-1	追跡	中皿	肥前	18c 中盤 (22.0)	5.3	(11.4)	灰白色	60	乗付。内面草花文。外側全体如意雲頭草文。高台内縫隙内に拂拭痕附れ。	
-	5	75-2	磁器	碗	肥前	17c 後半	-	-	3.6	白色	10	色鉢。外側全体草花文(赤・緑・黒色)。
11	5	76	追跡	中皿	肥前	18c 前半 ~18c 初半	(22.0)	3.0	14.2	灰白色	50	乗付。内面草花文(眞露文)。見込み縫隙内に松舟文。外側全体七宝文。高台内縫隙内に「眞露文」記。
-	5	77	磁器	中皿	肥前	17c末 ~18c 初半	-	3.0	-	灰白色	35	乗付。見込み松舟文。外側全体如意雲頭草文。高台内縫隙。
-	5	80	追跡	小皿	肥前	17c 後半	-	2.9	-	白色	40	白磁。赤切り加工成形。平面形は菱形で体部は花弁状。
-	5	81	磁器	中皿	肥前	17c末 ~18c 初半	-	-	8.2	白色	15	乗付。高台内赤リ加工瓶。見込み草文(コンニャク判)。外側全体草花文。高台内縫隙。
11	5	82	磁器	小皿	肥前	17c末 ~18c 初半	(10.6)	2.7	6.0	白色	60	乗付。内面全体花唐草文。見込み縫隙内に五舟花文。外側全体如意雲頭草文。高台内縫隙内に菱形文被覆。
11	5	83	磁器	五寸皿	肥前	1850年代 ~1860年代	15.0	3.0	7.3	稻白色	50	乗付。見込み草文(コンニャク判)。外側全体草花文。高台内縫隙。
11	5	84	磁器	五寸皿	肥前	18c 後半	14.0	3.7	8.4	不明	100	乗付。内面全体花唐草文。見込み縫隙内に五舟花文(コンニャク判)。外側全体草花文。高台内縫隙内に拂拭痕附れ。
-	5	85	磁器	五十目	肥前	18c 後半	13.0	3.4	7.7	不明	100	乗付。蛇の目形花台。内面全体松竹梅文。見込み縫隙内に花文。外側全体草花文。
-	5	86	磁器	五十目	肥前	18c 後半	15.2	4.8	8.8	白色/or 灰白色	85	乘付。蛇の目形花台。内面全体松竹梅文。見込み縫隙内に花文。外側全体草花文。
-	5	87	磁器	五十目	肥前	18c 後半	14.0	4.7	6.9	白色	85	青磁。黒打ち成形で体部輪花状。蛇の目形花台。
-	5	89	磁器	中皿	肥前	17c 後半	-	-	-	白色	40	乘片。青磁。見込み縫隙内に草花文。
11	5	92	陶器	小皿	戸戸・美濃	18c 前半	12.8	2.8	6.9	暗褐色	75	青磁。體部の外側底野物。見込み物状に拂拭取り。高台部周縁無釉。内外面端付。
-	5	93	陶器	小皿	戸戸・美濃	18c 前半	11.5 ~12.0	2.8 ~-3.2	5.4	暗褐色	90	内面裏面(擬紙張)。内面から外側全体灰釉(灰褐色)。高台部周縁無釉。
11	5	94	陶器	中皿	戸戸・美濃	19c の前半	(22.0)	5.0	7.1	暗褐色	50	青磁。体部内外側灰釉(灰褐色)。見込み物状に拂拭取り。高台部周縁無釉。
11	5	95	陶器	小皿	戸戸・美濃	17c 後半	-	-	-	青磁	50	乘片。墨打ち成形で体部輪花状。全面灰釉。内外面口縁部黒漆剥離。
11	5	96	磁器	中皿	肥前	18c 中盤 (23.0)	10.8	8.8	8.8	稻白色	40	乗付。内面全体区画刷毛文と草花文。見込み草文。外側全体灰釉。
11	5	97	磁器	大皿	肥前	18c 中盤	25.6	11.8	9.7	暗褐色	60	乗付。見込み縫隙内に草文。外側全体灰釉。高台内縫隙内に模様文。
11	5	98	磁器	小皿	肥前	18c 後半	13.8	7.0	4.8	暗褐色	60	乗付。見込み縫隙内に五舟花文(コンニャク判)。外側全体密窯筋に御墨文。高台内変形文字文。
11	5	99	磁器	中皿	肥前	18c 前半 ~18c 初半	15.0	7.8	6.2	白色	90	端反形。乗付。内外面墨文散らし。幾縞。
11	5	100	磁器	中皿	肥前	18c 前半 ~18c 初半	(19.4)	8.4	8.7	白色	40	乗付。見込み草花文。外側全体花唐草文。高台内縫隙。

発掘場名	発掘番号	出土品番号	材質	器種	生産地(約)	年代	口径	縦高	底径	胎土色	焼成度	特徴(成形・仕法、模様、文様、軸、脚、土、使用痕等)	
11	5	101	陶器	大鉢	肥前	18c	[26.2]	9.7	10.4	赤褐色	40	島手。内面体部草文と模様を白呂朱漆。内面から外面体部灰釉(透明)。	
11	5	102	陶器	小鉢	肥前	17c末 ~18c初頭	[11.8]	9.0	7.4	白色	50	島手。外側底部草花文。	
11	6	104	陶器	片口鉢	鹿児島・美濃	18c 前半	19.0	12.8	11.2	暗灰色	75	内面体部上平から外面体部灰釉。内面体部下半以下と高台部周囲無釉。見込みと高台部周囲無釉。	
11	6	105	陶器	片口鉢	鹿児島・美濃	19c 前半	16.0	8.8	8.6	青白色	70	内面から外面体部灰釉。高台部周囲無釉。見込み目盛3個。	
11	6	106	陶器	片口鉢	鹿児島・美濃	19c 後半	14.0	7.3	8.0	青白色	80	内面から外面体部灰釉。	
11	6	107	陶器	片口鉢	鹿児島・美濃	19c 前半	—	—	11.6	青白色	70	内面から外面体部灰釉。高台部周囲無釉。見込み目盛3個。	
—	5	108	陶器	牛角小鉢	鹿児島・美濃	18c 後半	6.8	5.8	3.5	灰白色	100	輪物台付。内面に高台部。見込みの隠れ内に五弁花文。外面体部斜子文の地に菊花文。高台部周囲無釉。	
12	6	109	陶器	惣利	鹿児島・美濃	17c末 ~18c初頭	—	—	12.0	灰褐色	30	一升惣利。外面灰釉。底面周囲無釉取り。	
12	6	110	陶器	惣利	鹿児島・美濃	17c 後半	3.5	24.5	10.5	灰白色	100	外面灰釉。底面周囲無釉取り。	
12	6	111	陶器	惣利	鹿児島・美濃	18c 後半	[3.4]	23.2	8.4	青白色	80	五合惣利。外面灰釉。底面周囲無釉取り。	
—	6・8	112	陶器	惣利	鹿児島・美濃	18c 後半	—	—	—	青白色	破片	五合惣利。外面灰釉。釘留き(縫跡)「少」。内面鉄分付着。	
—	6・8	113	陶器	惣利	鹿児島・美濃	18c 後半	—	—	8.8	青白色	70	五合惣利。外面灰釉。底面周囲無釉取り。釘留き(縫跡)「川司屋?」。	
12	6	114	陶器	惣利	鹿児島・美濃	18c 前半	2.5	—	6.5	青状色	90	五合惣利。外面灰釉。底面周囲無釉の後、肩部うの字彫刷し掛け。底面周囲無釉取り。外側体部下平から内面うの字彫刷の後、内面筋刷し掛け。外側体部下平以下無釉。	
—	5	115	陶器	瓶	長	19c 前半	[0.0]	6.0	—	暗灰色	30	三合惣利。外面灰釉。底面周囲無釉取り。	
12	6・8	116	陶器	惣利	鹿児島・美濃	18c 後半	3.4	18.8	6.4	暗灰色	100	三合惣利。外面灰釉。底面周囲無釉。	
12	6	117	陶器	惣利	鹿児島・美濃	18c 後半	3.5	20.3	6.6	暗灰色	100	三合惣利。外面灰釉。底面周囲無釉。	
12	6	118	陶器	惣利	鹿児島・美濃	18c 後半	4.0	24.7	19.4	暗灰色	90	一升惣利。外面灰釉。底面周囲無釉取り。	
12	6	119	陶器	惣利	鹿児島・美濃	19c 前半	—	—	6.8	青白色	45	一升惣利。ベコカン形。外面灰釉。体部下半以下を再利用か。割れ口の一部で敲打目。内面に付着。	
12	6	120	陶器	惣利	鹿児島・美濃	19c 前半	—	—	6.0	青白色	90	三合惣利。ベコカン形。外側飾物。	
12	6	121	陶器	惣利	鹿児島・美濃	19c 前半	2.0	11.2	4.8	青白色	100	一升惣利。ベコカン形。外面灰釉。	
12	6・8	122	陶器	惣利	肥前	18c 前半	—	—	6.7	青赤褐色	30	無施釉き締め。外側底面に「(印)」の刻印。外側無釉。	
—	6	123	陶器	惣利	肥前	18c 前半	—	—	—	青褐色	10	無施釉き締め。	
12	6	124	陶器	惣利	鹿児島・美濃	19c 前半	—	—	6.0	暗灰色	30	外側体部灰釉。底面無釉。	
12	6	125	陶器	惣利	芦戸	18c	—	—	[11.4]	暗灰色	40	一升惣利。吉右衛門惣利。外面灰釉。	
12	6	127	陶器	惣利	京焼	19c 前半	—	—	—	灰白色	破片	外側体部灰釉(透明)。	
—	7	128	磁器	神西惣利	肥前	18c 前半	—	—	5.2	白色	30	染付。外側体部草文。	
12	6	129	磁器	惣利	肥前	18c	—	—	6.6	暗灰色	30	染付。外側体部草文あり。	
12	6	130	磁器	惣利	肥前	18c	(5.0)	—	—	白色	20	染付。外側体部文様あり。	
12	色斑斑瓶	131	花器	花器	肥前	17c末 ~18c初頭	4.2	25.7	9.4	白色	90	染付。外側に絵斑文。底部七宝文。底部草花文。	
—	7	132	磁器	仏器	肥前	18c 前半	—	—	7.0	青褐色	20	染付。外側体部文あり。	
15	7	133	磁器	ミニチュア	肥前	19c 後半	1.3	6.1	2.4	不明	100	染付。外側体部梅花文。	
—	7	134	磁器	神西惣利	肥前	18c 後半	1.9	—	—	暗灰色	35	染付。外側体部梅花文。	
—	7	135	磁器	神酒惣利	肥前	18c 前半	[1.9]	—	—	白色	40	染付。外側体部タコ唐草文。	
—	7	136	磁器	神酒惣利	肥前	18c 前半	[1.9]	—	—	(5.2)	白色	30	染付。外側体部上半タコ唐草文。体部下半暗黒文。
15	7	137	磁器	神西惣利	肥前	18c 前半	[1.9]	—	—	5.4	白色	95	染付。外側底部から体部上半タコ唐草文。体部下半暗黒文。
—	7	138	磁器	惣利	肥前	18c 前半	—	—	5.3	桃色	30	染付。外側体部上半タコ唐草文。体部下半如意雲文。	
15	7	139	磁器	仏器	肥前	18c	7.5	5.0	4.2	白色	70	染付。外側体部草花。高台部周囲無釉。高台内無釉。	
15	7	140	磁器	仏器	鹿児島・美濃	18c	6.3	4.9	4.2	青白色	100	内面から体部・高台周囲無釉。高台内無釉。	
15	7	141	磁器	仏器	肥前	18c	(8.0)	5.3	3.5	白色	70	染付。外側体部文あり。高台内無釉。	
15	7	142	陶器	香炉	鹿児島・美濃	18c 前半	20.3	5.6	7.5	暗灰色	95	三粒貼付。外側体部模様取り半千字文。正面に横筋から外側体部灰釉。内面と外側底部周囲無釉。口折部に敲打痕あり。灰墨として乾用。	
—	7	143	陶器	香炉	鹿児島・美濃	17c 後半	14.8	5.1	[10.6]	青白色	40	内面口縁から外側体部灰釉。内面と外側底部周囲無釉。口唇部に敲打紙あり。灰墨として乾用。	
15	7	144	瓦質土器	灰落とし	在石	19c 前半	9.7	7.7	9.4	暗灰色	90	外側体部粗押印文。口唇部敲打直で原形とどめず。	
—	5	146	陶器	小鉢	鹿児島・美濃	—	7.0	3.5	3.2	灰白色	99	内面から外側体部灰釉。高台部周囲無釉。高台内無釉。	
—	7	147	磁器	急須	鹿児島・美濃	19c 後半	—	—	—	白色	15	コバルト染付。外側脚部「工」造。燒造痕。	
—	7	148	磁器	木製鉢	不明	19c 前半	7.0	5.1	4.7	紫色	70	二三(染付)。底部丸。全削修飾。	
—	7	149	磁器	小鉢	不明	19c 前半	—	—	—	白色	10	染付。盤形成形。圓形。上面に開口と文様あり。外側灰釉。	
—	7	150	磁器	水差	鹿児島・美濃	19c 前半	35.2	—	—	暗灰色	破片	盤形成形。圓形。上面に開口と文様あり。外側灰釉。	
—	7	151	磁器	水差	鹿児島・美濃	19c 前半	34.2	2.5	4.5	白色	98	盤形成形。圓形。上面に開口と文様あり。外側灰釉。底部無釉で鉄錆付着。	
—	7	152	磁器	ミニチュア	鹿児島・美濃	19c 前半	4.2	1.2	1.0	白色	100	染付。内面模様文。	

測定番号	測定番号	測定番号	材質	種類	生産年(月)	年代	口径	最高	底面	底土色	底特徴	特徴(成形・技法、種類、文様、輪、施土、使用箇所)
-	7	153	陶器	ミニチュア	非在地	17c末 ~18c初頭	5.1	3.3	3.0	黄褐色	80	天日台のミニチュア。施土は非在地。
-	7	154	陶器	お座高竈	窓戸・美濃	18c	-	-	6.5	黄白色	50	二耳窓。外側全体灰黒物。高台部無輪。内面・窓戸部に段分付窓。
-	7	155	陶器	仏花器	窓戸・美濃	17c末	-	-	-	黄白色	40	頭部に鏡文。外側全体灰黒物。高台部無輪。内面に段分付窓。お座高竈として使用。
-	7	156	陶器	片頭馬鹿	窓戸・美濃	18c	-	-	6.0	黄白色	20	二耳窓。外側全体灰黒物。高台部無輪。内面・窓戸部に段分付窓。
-	7	157	陶器	頭龜口	窓戸・美濃	19c前半	4.9	2.5	4.7	暗灰色	85	把手缺。内面から外側全体灰黒物。窓戸部無輪。外側全体に施土。
-	7	160	不明	鐵鋤玉	不明	17c ~18c	61.5	1.3	内側6.4	-	100	材質は、石製の可能性あり。外側に錆色の鋼継付か。
15	7	161	漆器	圓盤	肥前	18c前半	2.9	8.5	4.8	黄褐色	95	丸紋。外側全体墨丸文。
-	7	162	土器	碁石	在地	19c	径1.6	厚0.7	-	褐色	100	指紋による押印模(指紋)。
-	7	163	土器	碁石	在地	19c	径1.6	厚0.7	-	褐色	100	指紋による押印模(指紋)。
-	7	164	土器	碁石	在地	19c	径1.6	厚0.7	-	褐色	100	指紋による押印模(指紋)。
-	7	165	土器	人形	在地	19c	径0.5	厚0.2	-	暗褐色	20	深人形。頭(半顎)のみ残存。
-	7	166	土器	人形	在地	19c	径0.5	厚0.1	-	暗褐色	20	深人形。頭(半顎)のみ残存。
-	7	167	土器	丸めんこ	在地	19c	径2.3	0.8	底2.2	暗褐色	80	丸皿。
-	7	168	土器	丸めんこ	在地	19c	径0.7	厚0.7	底2.7	暗褐色	80	おかの皿。
13	6	169	陶器	指輪	窓戸・美濃	18c	径5.6	14.9	14.2	黄白色	30	口縁部外側に返折し。留目口2本で1単位。全蓋飾物。
13	6	170	陶器	指輪	塔	18c	33.2	13.8	15.8	赤褐色	60	留目口10本で1単位。無輪焼き附。注口部に刻印「火上」。
13	6	171	陶器	指輪	丹波	17c末 ~18c	-	-	-	墨褐色	80	無地。
-	7	173	陶器	指輪	窓戸・美濃	17c	-	-	-	黄褐色	-	口縁部五線状。内面の縫部から外側無輪。内面無輪。
-	6	174	陶器	手平鍋	不明	19c前半	14.8	-	-	赤褐色	20	注口より(點付)。外側全体墨黒トビガナナ底。内面・外側往口周囲・体部下半部無輪。外側全体墨黒。
-	6	175	陶器	手平鍋	不明	19c後半	14.0	7.3	8.6	黄褐色	55	外側全体墨黒トビガナナ底。内面・外側全体下半部無輪。外側全体無輪。外側全体墨黒付。
-	6	176	陶器	土鍋	窓戸・美濃	18c後半	-	-	8.8	黄白色	20	三星(點付)。内面・外側全体無輪。外側底部無輪。外側底部焼付。
-	6	177	陶器	土鍋	窓戸・美濃	18c後半	-	-	-	暗褐色	80	内外全体無輪。把手部分のみ残存。
-	6	178	陶器	土鍋	窓戸・美濃	18c後半	8.2	-	-	黄白色	30	算盤目形。把手半形。外側全体無輪。外側全体上半にはその上から灰腹底に掛け。
13	6	179	陶器	土鍋	京阪	18c後半	6.5	10.0	5.4	白色	70	算盤目形。把手半形。外側全体無輪。外側全体上半にはその上から灰腹底に掛け。
13	6	180	組合	煎豆草	肥前	19c	-	-	4.3	白色	80	算盤目形。柴口(半形)。外側全体墨黒。外側全体墨黒付。
-	6	181	陶器	土鍋	窓戸・美濃	18c後半	18.4	-	-	黄褐色	10	把手半形。内面から外側全体無輪。
-	6	182	陶器	土鍋	窓戸・美濃	18c後半	20.8	-	-	黄白色	10	把手半形。内面から外側全体無輪。
14	7	183	陶器	香爐	志戸昌	19c前半	4.5	13.0	5.5	黑色	100	内面無地以外墨黒。
14	7	184	陶器	香爐	志戸昌	19c前半	(4.4)	12.2	5.1	黑色	95	受皿部内面以外墨黒。
14	7	185	陶器	油漬利	窓戸・美濃	18c	2.2	13.7	6.1 ~6.2	灰白色	90	外側無輪。把手欠損。
14	7	186	陶器	受皿	窓戸・美濃	18c後半	5.5	4.4	4.3	灰白色	100	底穿孔。上半部無輪。下半部無輪。
14	7	187	陶器	灯明受皿	窓戸・美濃	18c後半	0.9	1.5	3.1	灰白色	100	受皿の切り込み細部。全面墨黒。
14	7	188	陶器	灯明受皿	窓戸・美濃	18c後半	7.7	1.3	2.5	灰白色	100	受皿の切り込み細部。全面墨黒。
14	7	189	陶器	灯明受皿	窓戸・美濃	18c後半	7.7	1.5	3.3	灰白色	100	受皿の切り込み細部。全面墨黒。
14	7	190	陶器	灯明受皿	窓戸・美濃	18c後半	7.8	1.8	3.0	灰白色	100	受皿の切り込み細部。全面墨黒。
14	7	191	陶器	灯明受皿	窓戸・美濃	18c後半	8.2	1.7	3.5	灰白色	100	受皿の切り込み細部。全面墨黒。
14	7	192	陶器	灯明受皿	窓戸・美濃	18c後半	10.0	2.3	4.7	灰白色	100	受皿の切り込み細部。全面墨黒。
14	7	193	陶器	灯明受皿	窓戸・美濃	18c後半	11.5	1.9	3.5	灰白色	100	受皿の切り込み細部。全面墨黒。
14	7	194	陶器	灯明受皿	窓戸・美濃	18c後半	8.3	1.3	4.3	灰白色	100	全面墨黒。
14	7	195	陶器	灯明受皿	窓戸・美濃	18c後半	10.1	2.1	4.6	黄白色	100	全面墨黒。
14	7	196	陶器	灯明受皿	窓戸・美濃	18c後半	11.0	1.7	4.6	暗褐色	90	全面墨黒。
14	7	197	陶器	灯明受皿	窓戸・美濃	17c末 ~18c前半	8.6	2.0	5.0	灰白色	80	口縁部に粘土焼付柱。内面から外側全体灰黒物。外側全体無輪。
14	7	198	陶器	灯明受皿	窓戸・美濃	17c	9.2	1.9	4.6	黄白色	95	内面から外側全体灰黒物。外側全体無輪。
14	7	199	陶器	灯明受皿	宿業	19c	8.7	2.2	3.5	乳白色	100	受皿の切り込み「U」の字状。内面から外側全体灰黒物(透明)。外側全体無輪。
14	7	200	陶器	灯明受皿	宿業	19c	11.2	2.5	3.8	乳白色	100	受皿の切り込み「U」の字状。内面から外側全体灰黒物(透明)。外側全体無輪。
14	7	201	陶器	灯明受皿	志戸昌	17c末 ~18c前半	11.4	2.9	4.7	露赤褐色	50	受皿に穿孔。全面墨黒。
14	7	202	陶器	灯明皿	志戸昌	17c末 ~18c前半	9.6	1.6 ~1.8	5.7	露赤褐色	100	全面墨黒。
14	7	203	陶器	灯明受皿	志戸昌	17c末 ~18c前半	11.4	2.0	4.5 ~4.8	露赤褐色	70	受皿に穿孔。全面墨黒。
-	7	204	土器	瓦灯籠	在地	18c	(19.0)	4.9	(21.6)	褐色	60	外側全体に焼付着。
13	6	205	土器	燈塔	在地	19c前半	12.0	5.1	8.5	赤褐色	90	外側底部以外墨黒物。炒り網。

測定番号	測定番号	材質	種類	生産地(国)	年代	口径	高さ	底径	鉢色	陶器名	特徴(形・技法・装飾、文様、物、土、使用歴等)		
13	6	土器	焼成	在地	18c	36.4	5.4	30.0	褐色	60	C b, 土器に雲母・石英多量に含む。外側面・底面に焼付層。		
13	6	207	土器	焼成	在地	18c	(37.8)	5.0	(31.2)	褐色	30	C f, 外面底部ちぢれ目。土器に雲母・石英多量に含む。	
13	6	208	土器	焼成	在地	18c	-	-	褐色	硬片	A h, 土器に雲母・石英少量含む。外側面・底面に焼付層。		
13	6	209	土器	焼成	在地	18c	(37.0)	4.9	(39.0)	褐色	硬片	A b, 土器に雲母・石英微量含む。	
13	6	212	土器	焼成	在地	18c	(46.0)	4.9	(31.4)	暗褐色	硬片	B b, 土器に雲母・石英微量含む。	
13	6	213	土器	焼成	在地	18c	(35.0)	5.0	(30.4)	褐色	25	C b, 外面底部ちぢれ目。土器に雲母・石英多く含む。	
13	6	214	土器	焼成	在地	18c	(28.0)	-	-	褐色	硬片	E c, 土器に雲母・石英含まず。	
13	6	216	土器	焼成	在地	18c	(36.0)	-	-	赤褐色	破片	D d, 外面全体部付着。	
13	6	217	土器	焼成	在地	18c	-	-	-	瓦質	破片	D k,	
13	6	218	土器	焼成	在地	18c	(30.6)	-	-	陶肌色	破片	F d,	
14	7	219	土器	火照査	在地	18c	(21.0)	20.5	(19.0)	赤褐色	30	外面部部分的に剥落。	
14	7	220	土器	火鉢	在地	19c 前半	25.5	14.3	19.3	赤褐色	70	三足鉢付(残存2個)。外側全体横縫位の辺縫で区画した中に半月型の割りと刺突文。外側全体に帯が付着しており誰が重ねていた可能性あり。	
-	7	221	土器	火鉢	在地	18c	(30.5)	13.3	18.4	非褐色	70	三足鉢付(残存2個の痕跡)。内面に縦部焼付帯。	
14	7	222	瓦質土器	火鉢	在地	18c 前半	~19c 前半	-	-	(24.0)	暗灰褐色	20	三足鉢付(残存1個)。外側底部ちぢれ目。外側全体横縫位の辺縫で区画した中に幾何学文の押印文。
14	7	223	瓦質土器	火鉢	在地	18c 前半	~19c 前半	(30.0)	-	-	暗灰褐色	5	外側横縫位の辺縫で区画した中に唐草文の押印文。
14	7	224	陶器	手あぶり (火もらしい)	鹿児島県	19c 前半	-	13.7	9.3	黄白色	90	外側鐵物、内面・高台部周囲無釉。	
-	6	225	土器	燒成直	在地	19c 前半	-	-	-	褐色	破片	ロクロ形態、供應品。	
-	6	226	陶器	直	常滑	16c	(29.2)	-	-	褐色	-	口縁部「N」字状。	
-	6	227	土器	直	在地	17c~19c	(66.4)	-	-	非褐色	5	動土に雲母・石英多量に含む。	
12	6	228	土器	燒成直	窓西	18c 前半	(8.0)	1.8	7.8	赤褐色	40	外面天井部に刻印(二重井内に列段不読文字)。	
12	6	229	土器	燒成直	窓西	18c 後半	7.0	8.0	5.2	褐色	80	板巻き形態、内面布目底、土器に雲母少量含む。	
-	6	230	土器	燒成直	窓西	18c 前半	(8.2)	1.7	(8.0)	赤褐色	20	ロクロ形態、底面切目切り底。	
12	6	231	土器	燒成直	在地	19c 前半	-	-	-	赤褐色	20	ロクロ形態、底面切目切り底。	
-	7	232	陶器	直	鹿児島県	18c	9.77	1.6	5.3	乳白色	100	底面切目切り底。外側灰物、内面無釉。内面鉄分付着。	
-	7	233	陶器	直	鹿児島県	18c	7.4	1.4	4.3	灰白色	100	外側灰物、内面無釉。	
-	7	234	陶器	直	肥前	18c	11.9	5.4	3.0	白色	100	内面口部無釉。	
-	7	235	器物	直物の直	肥前	18c 前半 ~19c 前半	(13.4)	3.5	4.5	白色	90	象形、外面吉賀句文・葉気文(宋羅々)、把手欠損。	
-	7	236	陶器	直物の直	京焼	18c 前半	(12.4)	3.5	2.0	乳白色	45	外側全体部で折枝文、内面無釉。	
-	7	237	陶器	直物の直	北川村	18c	10.8	3.5	1.5	赤褐色	100	外側灰物、内面無釉。	
-	7	238	陶器	水注の直	京焼	18c 前半	(12.0)	2.6	4.7	褐灰物	45	外側灰物(不明)、内面無釉。	
-	7	239	陶器	利掛	鹿児島県	17c 前半	-	-	4.8	乳白色	30	志野繪。外側全体部で文様を描く。外側に枝で唐草文。	
17	7	240	陶器 (火鉢)	埋漬	不明	不明	4.3	4.7	-	黒褐色	100	重量36.0g。	
17	7	241	陶器 (火鉢)	埋漬	不明	不明	3.6	3.7	-	黒褐色	100	内面金属の付着物多量。重量39.7g。	
17	7	242	陶器 (火鉢)	埋漬	不明	不明	4.5	5.0	-	黒褐色	90	重量51.4g。	
17	7	243	不明	羽口	不明	不明	最大径 16.2	-	内面4.0	非褐色	-	口に金属多量付着。(大)。	
17	7	244	不明	羽口	不明	不明	最大径 9.0	-	内面3.5	褐赤褐色	-	(中)。	
17	7	245	不明	羽口	不明	不明	最大径 5.5	-	内面3.5	褐赤褐色	-	(小)。	
15	1	246	瓦質	軒丸瓦	不明	17c ~18c?	16.8	-	-	暗灰褐色	50	三巴文。唐文(16)。圓錐あり。電の縦道に転用。焼付着。	
15	7	247	瓦質	軒丸瓦	不明	17c ~18c?	16.7	-	-	暗灰褐色	20	三巴文。唐文(16)。圓錐なし。電の縦道に転用。焼付着。	
15	7	248	瓦質	軒丸瓦	不明	18c~19c	7.4	-	-	暗灰褐色	10	三巴文。	
15	7	249	瓦質	軒丸瓦	不明	18c~19c	-	-	-	暗灰褐色	5	唐草文(爆烈)。文様は江戸式。	
15	7	250	瓦質	軒丸瓦	在地	18c 前半	-	-	-	暗灰褐色	10	唐草文(爆烈)。文様は江戸式。	
15	7	251	瓦質	軒丸瓦	在地	18c 前半	8.1	-	-	暗灰褐色	5	三巴文。唐文(8)。	
15	7~8	252	瓦質	軒丸瓦	東海	18c 前半	-	-	-	暗灰褐色	25	唐草文。文様は東海系。刻印「日」あり。被熱、焼付着。	
15	7~8	253	瓦質	軒丸瓦	東海	18c 前半	-	-	-	暗灰褐色	25	唐草文。文様は東海系。刻印「日」あり。	
15	7	254	瓦質	丸瓦	不明	19c	13.8	長さ 26.0	-	暗灰褐色	80	裏面に2本枕線。	
-	7	255	瓦質	丸瓦	不明	19c	14.5	-	-	暗灰褐色	45	被熱、暗色、裏に沈緑なし。	
-	7	256	瓦質	鬼瓦	不明	17c~19c	-	-	-	暗灰褐色	5	鼻と角の部分片。	
15	7	257	瓦質	鬼瓦	不明	17c~19c	-	-	-	○	#2種(押印比縫)。		

件名	目録番号	通称	材質	器種	生産地(原)	年代	口径	縦高	横幅	底土色	底材質	特徴(形態・技法、紋様、文様、貼、施土、使用伝承)
-	7	256	瓦質	瓦	不明	17c~19c	-	-	-	暗灰色	5	下部片。
-	5	268	磁器	半圓形小瓶	肥前	18c後半	8.2	5.9	4.3	白色	50	色絵。内面口縁部西方文。見込み模様内に五弁花文。外側全体模草花文(赤・緑色・青色)。高台部周縁黒文。
-	5	269	磁器	瓶	肥前	1630年代~1660年代	-	-	4.6	暗灰色?	10	色絵。外側全体文様あり(赤色)。
-	5	270	磁器	瓶	肥前	17c後半	(11.0)	5.6	3.6	白色	45	(特記事項なし)
-	5	271	磁器	小瓶	肥前	17c後半~18c初期	高9.2 幅4.8	1.9	4.9 幅3.0	不明	100	未切口。変形長方形。朱村。内面斜格子文(紙張)。外面全体草花文。
11	5+8	272	陶器	中鉢	肥前	17c後半	20.2	6.5	7.9	黄白色	25	端丸形。体間に施模所跡あり。見込み模で山水模様。内面から外側全体模(透明)。高台部周縁黒文。高台内工具による円筒と窯印「美」。
11	5+8	273	陶器	香炉	肥前	17c後半	(11.4)	6.9	5.2	黄白色	45	京焼風。内面口縁部外側模で灰模(透明)。内面と高台部周縁黒文。高台内工具による円筒と窯印「新」。
11	5	274	陶器	中鉢	肥前	17c後半	-	-	7.5	黄白色	35	京焼風。内面口縁部模で草文。内面から外側全体模(透明)。高台部周縁黒文。高台内中央工具による円筒。
11	5	275	陶器	中鉢	肥前	17c後半~18c前半	-	7.9	6.7	乳白色	35	見込み模の捺印ハグ。内面から外側全体模有模跡と模様の掛け分け。高台部周縁黒文。
-	6	276	陶器	水注	肥前・美濃	18c	-	-	8.3	灰白色	80	注口・貼手輪付。内面から外側全体模模跡。高台部周縁黒文。
12	6	277	陶器	水注	肥前・美濃	18c	(4.7)	9.8	6.5	黄白色	95	注口・貼手輪付。内面から外側全体模模跡。高台部周縁黒文。
12	6	278	陶器	水注	肥前・美濃	18c	7.0	8.7	5.5	灰白色	98	注口・貼手輪付。内面から外側全体模模跡。高台部周縁黒文。
-	8	280	陶器	(鉢)洞	肥前	17c後半	-	-	(5.2)	灰白色	15	京焼風。内面から外側全体模(透明)。高台部周縁黒文。高台内工具による円筒と窯印「新」の反転文字。
-	7	282	土器	うそく器の光陽	生地	18c~19c	-	-	2.3	墨色	80	高脚孔。
14	7	283	陶器	火鉢	肥前・美濃	18c後半	-	-	(22.8)	黄白色	30	瓶形。足跡付(足跡判)。外側全体に草文と雷文の押印文。内面裏に剪絆。外側漆。
-	7	285	陶器	瓶	不明	18c~19c	1.4	2.5	5.8	褐色	100	
15	7	287	土器	かわらけ	生地	18c中期~後期	11.0	2.6	9.0	墨色	90	ロクロ水巻き形。高脚細糸切り瓶。口縁部内面に暗赤褐色の付着物あり。
15	7	288	土器	かわらけ	生地	18c中期~後期	9.5	1.8	5.5	墨色	90	ロクロ水巻き形。高脚細糸切り瓶。
-	7	289	磁器	小杯	肥前	18c後半	-	-	2.7	白色	破片	紅豆色、色絵。外側全体に羽つき文。29と同一個体か。
-	7	290	磁器	小杯	肥前	18c後半	(6.6)	-	-	白色	破片	紅豆色、色絵。外側全体に羽つき文。29と同一個体か。
-	7	291	土器	火入れ	生地	18c後半	(18.3)	8.3	9.0	墨色	65	締封「福」あり。
-	8	292	陶器	口片鉢	生地	18c後半	(18.0)	-	-	褐色	10	内外全体模(透明)の形。口縁部の上端視し抜け。
-	8	293	陶器	土瓶	生地	19c後半	(9.0)	-	-	黄白色	40	把手は軟土貼付。外側全体に毫練山水文(台化文の上にコバルトと銀)。内面裏に剪絆。外側漆。外側模有模跡。外側漆原形有。
-	7	294	土器	敷輪	生地	19c後半	(31.6)	5.2	(26.6)	墨色	50	内外全体模付。
-	7	295	土器	敷輪	生地	19c後半	(36.6)	5.0	(32.0)	墨色	50	内外全体模付。
-	6	296	陶器	瓶	常滑	18c	(76.2)	-	-	暗灰色	破片	口縁断面「丁」字形。
13	6	297	陶器	半圓瓶	肥前・美濃	18c後半~19c前半	30.0	22.6	12.8 ~13.0	墨色	70	内面から外側全体模模跡。高台部周縁黒文。
-	8	298	陶器	土瓶の蓋	生地	19c後半	7.1	2.5	2.0	乳白色	100	つまみ壓形。外側白化粧の上から袋で斜格子文とコバルトで文模あり。内面無地。298の蓋。
-	8	299	陶器	土瓶	生地	19c後半	8.0	9.5	(6.4)	乳白色	70	把手は軟土貼付。外側白化粧の上から袋で斜格子文とコバルトで文模。内面無地(透明)。高台部周縁黒文。
-	8	300	陶器	大皿	生地	19c後半	31.0	5.8	13.4	墨色	40	内面から外側全体模(透明)の上から口縁部のふち。高台部周縁黒文。
-	8	301	陶器	鏡神(小)	生地	19c後半	(15.6)	-	-	乳白色	15	鏡神12本か13本で1単位。内面から外側全体模。外側全体下手模。
-	8	302	陶器	鏡神	生地	19c後半	(26.5)	-	-	墨色	破片	内面全体模。内面口縁部から裏張紙。
-	8	303	磁器	瓶	肥前・黄島	19c後半	8.5	4.4	3.1	-	100	口綻。外側全体模書体の文字文。見込み模縁内に文模あり。
-	8	304	磁器	小杯	不明	19c中期	-	-	2.6	白色	破片	江戸輪付。外側輪付縁。見込みしたまき骨色で「おかざき屋」。
-	8	305	磁器	小杯	肥前・黄島	19c中期	-	-	2.3	白色	破片	江戸輪付。外側輪付縁。見込み金色で「水戸屋」。
-	8	306	磁器	小杯	肥前・美濃	明治?	-	-	2.5	白色	破片	江戸輪付。見込みしたまき骨色で水草文。高台部周縁輪付で文模あり。
-	8	307	磁器	小皿	肥前・美濃	19c後半	9.8	1.7	5.8	白色	100	見込み模打ちで山水模縁文の上にダミ。
-	8	308	磁器	小皿	肥前・美濃	19c後半	9.8	1.9	4.5	白色	80	捺付。見込み模打ちで唐獅子と社文の上にダミ。
-	8	309	磁器	小杯	肥前・美濃	19c後半	7.5	2.0	2.7	暗灰色	95	コバルト捺付虹色。外側全体模と松竹梅文(墨紙模様)。
-	8	310	磁器	蓋物の蓋	肥前	19c後半	8.5	3.5	1.1	白色	90	捺付。外側全体模文と草花文。内面口縁部模。
-	8	311	磁器	瓶	肥前・黄島	19c後半	(10.0)	6.1	(4.2)	白色	45	コバルト捺付。内面口縁部半円形を帯状に選視。見込み模縁内に文模あり。外側模跡よりうじま。
-	8	312	磁器	小杯	肥前・美濃	19c末	-	-	-	暗灰色	破片	網版底写。外側全体模花文(青色)。
-	8	313	磁器	小杯	肥前・美濃	19c末	-	-	-	白色	破片	網版底写。外側全体模縁に唐草文(青色)。
-	8	314	磁器	小杯	肥前・美濃	19c末	(8.4)	4.3	(3.8)	白色	40	網版底写。外側全体模花文(青・茶色)。
-	8	315	磁器	小杯	肥前・美濃	19c末	(3.5)	-	-	白色	20	コバルト捺付。外側全体模花文。
-	8	316	磁器	小杯	肥前	19c後半	(8.6)	3.1	(3.2)	白色	30	捺付。外側全体模草花文。
-	8	317	磁器	小杯	肥前・美濃	19c中期	(5.2)	2.5	(2.2)	白色	破片	捺付。見込み山水文。
-	8	318	磁器	小杯	肥前・美濃	19c末	-	-	(3.4)	白色	破片	コバルト捺付。外側高台部模。

調査番号	遺物番号	遺物名	材質	器種	生産地(原)	年代	口径	器高	底径	胎土色	残存状	特徴(成形・技法、模様、文様、釉、胎土、使用痕等)
-	8	319	陶器	小杯	窓戸・美濃	19c末	(6.2)	-	-	白色	30	コバルト染付。外側全体上半草花文。
-	8	320	陶器	小杯	窓戸・美濃	明治?	(7.3)	4.3	2.7	白色	45	染付。外側全体上半草花文。下半鉛文。
-	8	321	陶器	片口鉢	益子	19c後半	(13.4)	8.0	5.8	灰褐色	40	内面から外側全体灰塗(透明)の上から、口縁部うの上輪廻し焼け。高台部周縁無。
17	7	332	正器	壺	不明	不明	4.1	4.5	-	暗灰色	50	重量19.7g。
-	5+8	337	陶器	五寸瓶	窓戸・美濃	19c中盤	15.0	4.0	7.7	白色	90	磨打も成形で全体輪廻し焼け。続の目凹部高台、染付。内面全体区画斜斜格子文と半周文。外側全体底草文。高台内墨書きあり。
14	6+8	338	陶器	水差	窓戸・美濃	19c前半	32.0	13.5	19.0	黄白色	50	外側全体輪廻し焼けで輪廻文。内面から外側全体灰塗の後外側には輪廻と鉛文焼付。染付。高台内墨書きあり。
-	8	339	陶器	碗	窓戸・美濃	19c後半	13.5	6.2	4.4	黄白色	90	輪廓手。内外製白紀による削毛削文(外削は横削文)。高台内墨書き「イタ」。
-	8	340	陶器	湯呑瓶	京焼	18c後半	8.6	7.0	5.3	暗灰色	90	磨形は竹筒をモチーフ。外側全体輪廻文。内面から外側全体上半灰塗。体部下半は鉛文の上から灰塗物。高台部周縁無。高台内墨書きあり。
-	8	341	陶器	小杯	窓戸・美濃	18c	6.5	3.5	3.0	黄白色	80	内面から外側全体灰塗。高台部周縁無。高台内墨書きあり。
-	8	343	陶器	碗	京焼	18c後半	-	-	5.4	黄白色	10	内面から外側全体灰塗。高台部周縁無。高台内墨書きあり。底部のみ焼付。
-	8	344	陶器	中皿	窓戸・美濃	19c前半	21.5	6.6	7.6	黄白色	60	輪光面。内外面全体灰塗。見込み・高台部周縁無。高台内墨書きあり。底部のみ焼付。
-	8	345	陶器	中皿	窓戸・美濃	19c前半	-	-	8.9	黄白色	10	輪光面。内外面全体灰塗。見込み縫に目状に輪廻し。高台部周縁無。高台内墨書きあり。
-	8	346	陶器	土瓶	京焼	18c後半 ~作C前半	-	-	7.0	黄白色	20	内面墨書き(透明)。外側無。外側底感に墨書きあり。底部のみ焼付。
-	8	347	陶器	涅鉢	窓戸・美濃	19c前半	-	-	16.0	黄白色	10	縫の目高台、内面と外側全体灰塗。外側は輪廻し焼け。高台部周縁無。發付に墨書きあり。底部のみ焼付。
-	8	348	陶器	晉炉	窓戸・美濃	19c後半	11.1	5.7	7.5	黄白色	45	三足立台。外側全体輪廻文。外側全体灰塗。内面と高台部周縁無。外側底部に墨書き「上」。底部のみ焼付。
-	7+8	349	陶器	水滴	窓戸・美濃	19c前半	-	(8.5)	7.0	乳白色	80	大底丸。磨打成形。底面以外は灰塗。底面無。底部に墨書きあり。

第3表 SD-001出土石製品観察表 () は推定値

辨認番号	回収番号	遺物番号	器種	石質	計	重	寸	残存度	特徴
					長さ(cm)	最大幅(cm)	最大高(cm)	個数(6)	
16	7	159	網	砂岩	17.5	7.3	2.3	511	90 縦10%欠損。底面に縦列跡。
9	7	250	局部磨耗 石斧	砂岩	8.9	5.4	1.4	100	刃部両刃。石器にプライマリーなローム付着。
16	7	260	砾石	砂岩	19.2	7.9	5.4	1220	100 使用痕の凹部あり。上下面磨耗痕。
16	7	261	砾石	漂砾岩	9.2	3.2	2.0	119	60 使用痕の凹部あり。上下面磨耗痕。
16	7	262	砾石	漂砾岩	16.4	3.2	2.4	275	95 使用痕の凹部あり。上下面磨耗痕。
16	7	263	石臼	安山岩	25(29.0)	—	7.2	920	10 石材产地鬼沼川系。上臼。
16	7	264	石臼	安山岩	26(26.8)	—	7.4	1170	30 被刷。下臼。
16	7	265	火打石	メノウ	6.5	5.0	3.0	75	100 使用痕あり。
16	7	266	網	安山岩	9.0	10.9	2.6	338	100 人為的削除痕あり。原石か。
16	7	267	網	安山岩	9.8	11.7	3.9	440	100 人為的削除痕あり。原石か。

第4表 SD-001、SK-001出土銅貨観察表 () は推定値

辨認番号	回収番号	遺物番号	造幣番号	銅貨	材質	直径(mm)	厚さ(mm)	内径(mm)	重量(g)	特徴
18	8	362	SD-001	永承通宝	銅	25.0	1.4	5.5	2.9	文鏡。寛文8年(1698)～天和3年(1683)。
17	8	363	SD-001	永承通宝	銅	25.5	1.2	6.0	2.7	文鏡。寛文8年(1698)～天和3年(1683)。
17	8	364	SD-001	永承通宝	銅	25.4	1.2	5.8	3.2	文鏡。寛文8年(1698)～天和3年(1683)。
17	8	365	SD-001	永承通宝	銅	22.0	1.0	6.0	1.7	四文鏡。明和5年(1768)～天明6年(1786)。
17	8	366	SD-001	永承通宝	銅	26.6	1.4	6.4	4.9	四文鏡。明和5年(1768)～天明6年(1786)。
17	8	367	SD-001	永承通宝	銅	27.9	1.3	6.5	4.9	四文鏡。明和5年(1768)～天明6年(1786)。
17	8	368	SD-001	永承通宝	銅	27.7	1.1	7.3	3.1	四文鏡。明和5年(1768)～天明6年(1786)。
17	8	369	SD-001	永承通宝	銅	24.8	1.0	6.4	2.5	四文鏡。明和5年(1768)～天明6年(1786)。
17	8	370	SD-001	永承通宝	銅	24.4	0.8	7.5	1.6	四文鏡。明和5年(1768)～天明6年(1786)。
17	8	371	SD-001	永承通宝	銅	24.2	1.2	6.5	3.3	四文鏡。明和5年(1768)～天明6年(1786)。
—	8	372	SD-001	永承通宝	銅	24.8	1.2	6.0	(1.6)	四文鏡。明和5年(1768)～天明6年(1786)。
—	8	373	SD-001	不明	銅	28.5	2.0	6.5	3.5	四文鏡。文久3年(1863)。
17	8	374	SD-001	文久永承	銅	26.0	1.3	6.2	4.5	四文鏡。文久3年(1863)。
—	8	375	SD-001	不明	銅	—	—	—	(17.4)	鎌倉鉄(4枚)。
—	8	376	SD-001	不明	鉄	25.5	1.6	—	4.4	四文鏡。
—	8	377	SD-001	不明	鉄	27.8	2.3	—	8.5	四文鏡。
—	8	378	SD-001	不明	鉄	25.7	2.7	6.8	3.2	四文鏡。
—	8	379	SD-001	不明	鉄	27.6	3.4	—	(4.7)	四文鏡。
—	8	380	SD-001	不明	鉄	25.8	2.1	—	(2.0)	四文鏡。

第5表 SD-001、SD-003出土鉄・銅製品観察表 () は推定値

辨認番号	回収番号	遺物番号	造幣番号	器種	材質	長さ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存度	特徴
17	8	158	SD-001	キセイ羅首	銅	32	先巾16 基巾14	7	100	18世紀～19世紀。
17	8	350	SD-001	釘	鉄	99	—	20	100	—
17	8	351	SD-001	釘	鉄	75	—	8	100	—
17	8	352	SD-001	釘	鉄	108	—	19	100	—
—	8	353	SD-001	十輪	鉄	(122) mm	—	—	30	—
17	8	354	SD-001	羅首羅首	銅	41	先巾7 基巾6	3	80	18世紀～19世紀。
17	8	355	SD-001	羅首羅首	銅	35	先巾7 基巾6	2	80	18世紀～19世紀。
—	8	356	SD-001	小柄	銅	—	—	—	30	—
17	8	361	SD-001	網	鉄	92	9	114	100	—
—	7	383	SD-001	鉄棒	鉄	巻頭141 巻足94	—	560	—	鉄形神。
—	7	384	SD-001	鉄棒	鉄	巻頭137 巻足118	—	410	—	鉄形神。
18	8	357	SD-003	釘	鉄	112	—	32	100	木質部付着。
18	8	358	SD-003	釘	鉄	115	—	34	100	木質部付着。
18	8	359	SD-003	釘	鉄	115	—	28	100	木質部付着。
—	8	360	SD-003	釘	鉄	111	—	25	100	木質部付着。
18	8	381	SD-003	刀劍	鉄	527	—	410	99	側先鋒部欠損。近世の腰差か。目釘穴1孔あり。
18	8	382	SD-003	刀劍	鉄	488	—	311	98	側先鋒部欠損。目釘穴3孔あり。腰差あり。

第6表 SD-001出土遺物材質別集計表・組成率表 () は個体数

分類	漆戸・表漆	常漆	丹	波	京・唐漆	硝	備前	志戸呂	肥前	在地	不明	その他	合計	組成率(%)
陶器	1445 (347)	74 (5)	31 (5)	184 (79)	109 (15)	8 (6)	23 (20)	187 (61)	542 (83)	3,603 (821)	34.7 (35.5)			
磁器	513 (83)							1,176 (575)	6 (5)	1,494 (563)	19.9 (27.2)			
土器									1,819 (364)	3 (3)	1,822 (367)	24.3 (15.1)		
瓦										788 (-)	788 (-)	10.5 (-)		
鉄製品										138 (126)	138 (126)	1.8 (5.2)		
鋳製品										23 (22)	23 (22)	0.3 (1.0)		
削製品										566 (598)	566 (598)	8.0 (24.5)		
石製品										39 (39)	39 (39)	0.5 (1.6)		
ガラス製品										0 (0)	0 (0)	0 (0)		
木製品														
合計	1,758 (430)	74 (5)	31 (5)	184 (79)	109 (15)	8 (6)	23 (20)	1,362 (636)	1,819 (364)	1,349 (877)	788 (-)	7,505 (2,437)		

III まとめ

今回の調査で、松林寺所蔵の『松林寺古絵図』の記載と一致する、旧松林寺の土壘・堀跡が確認された。堀跡からは、多量の近世陶磁器、土器、瓦、鉄滓等が出土した。陶磁器の大半は、18世紀代から近世末のもので、一部明治初頭のものも含まれる。

これらの遺物は、いつごろいかなる理由によって、松林寺の堀に廃棄されたのであろうか。まず、廃棄の時期であるが、第II章で述べたとおり、土層と遺物の時期差の関係からみて、ごく短期間に一気に廃棄されたと思われる。また、明治初頭の陶磁器やガラス製品（瓶、小瓶、板ガラス等）が伴出していること、明治17年（1884）に松林寺本堂が解体されたという記録¹¹（第7表）があることから、廃棄時期もそのころとみてよいだろう。なお、本堂解体の理由は、廃仏棄釈によるものか、単なる老朽化によるものか不明である。

『松林寺古絵図』を見ると、本堂の隣に庫裏が描かれている。記録によると「間口8間、奥行6間」¹²とある。おそらく、この庫裏には仏事や生活に伴う食器類が多量に保管されていたと思われる。しかし、明治元年に、松林寺の地所の一部が官有地になり、警察署や小学校の敷地になってからは¹³、松林寺の土壘や堀は無用のものとなったであろう。そこで、本堂と庫裏を解体するに当たって、不要な食器類や生活用品を堀に一括投棄し、合わせて、土壘を削平して堀を埋め、整地したものと推定される。

しかし、寺の庫裏から出た廃棄物にしては仏事関係の遺物が少なく、遺物の種類が多岐にわたることが疑問点として残る。また、生活用品のほかに、坩埚、鉄滓、羽口などの鍛冶関係の遺物が大量に出土した

第7表 玉宝山松林寺の歴史変遷表

和歴	西暦	歴史的事項
慶長10	1605	松林寺懸音堂建立（3間4間）。開山領主上人。
15	1610	土井利勝、小見川より佐倉城入府。22,000石を与えられ、老中職となる。
16	1611	佐倉城の築城開始。
元和2	1616	佐倉城完成。
寛永7	1630	9月、土井利勝父母・夫人の供養塔（宝蓋印塔3基）建立。
10	1633	『松林寺古絵図』（寸法、縱80cm、横80cm）描かれる？（市内最古の絵図）。
文化14	1817	土井利勝の在府終わり、下総国の古河へ移封される。
明治元	1868	18世紀開上人。見沙門堂建立（2間4面）。
8	1875	明治維新で官有地。
10	1877	10月、佐倉警察署（出張所）を松林寺（弥勒町96番地）に設置。84坪。
15	1882	松林寺（官有地）の地所を弥勒小学校用地に払い下げる。
16	1883	1/20,000迅速測図『佐倉』測量。旧松林寺の寺域の測図あり（第4図）。
17	1884	12月5日、弥勒小学校新校舎落成。
		6月、佐倉警察署を新町へ移転。
		8月、松林寺本堂を取り壊す（10間四方）。庫裏間口8間、奥行6間、境内2300坪
		官有地第4種あり。住職・森徹圓。権徒49人。
21	1888	10月、佐倉警察署（出張所）を松林寺（弥勒町96番地）に設置。
		9月、弥勒小学校と外3校を統合し、佐倉尋常小学校とする。
23	1890	弥勒小学校跡地（弥勒町94番地・現検察庁）に千葉治安裁判所佐倉出張所設置。
38	1963	8月、千葉治安裁判所佐倉出張所を佐倉区裁判所と改称。
42	1909	9月24日、裁判所庁舎造営（弥勒町95番地）。弥勒小学校跡地に佐倉税務署開設。
43	1910	9月2日～9月7日、佐倉中学校生徒有志で松林寺から鍋山まで道路開削。
44	1911	2月、鍋山新校舎上棟。
大正8	1919	11月1日、裁判所増築。土蔵新築（弥勒町94番地）。
9	1920	裁判所を現在地（弥勒町92-6、7）に新築移転。
10	1921	8月10日、裁判所庁舎落成。
昭和38	1963	1/25,000地形図『佐倉』測量。旧松林寺の測図なし（第5図）。
		現千葉地裁家庭裁判所佐倉支部庁舎竣工。

が、明治初期まで、寺域内あるいは近隣に鍛冶場があったのであろうか。現在でも、松林寺の土壘跡の周辺や、検察庁の裏では、鉄滓や羽口が表面採集できる。

なお、佐倉市域には「鍛冶作」という小字名があり、刀鍛冶に関連すると考えられている。また、市内の大型院には、大砲の玉を鋳造した鍛冶場があり、鉄滓が出土しているという。

次に、本遺跡の堀跡から多量に出土した焼物（陶磁器、土器）について、江戸市中との比較でまとめてみたい。

まず、出土量の多少であるが、都市部に多く農村部に少ないものとして、通い徳利・かわらけ・植木鉢（転用植木鉢の半胴甕を含む）があげられる。本遺跡の遺物は、通い徳利とかわらけが、江戸市中と農村部の中間的量であることが指摘できる。

一般的に、通い徳利は消耗品として使われていたと考えられており、完形品が多い。本遺跡のものも、同様の傾向を示すと思われる。なお、本遺跡の通い徳利は、農村部ではほとんど見られない器種である。

かわらけは、出土量・形態ともに江戸市中のものである。しかし、江戸市中では、灯明皿としての用途为主要であるのに対し、本遺跡のものは煤の付着例が極めて少ないとからして、神仏具と見てよいだろう。

なお、灯火具では、都市部はかわらけをはじめとして、土器製（施釉土器を含む）の灯明皿・秉燭が一定量出土する。一方、農村部では、瀬戸・美濃産や信楽産のものが多い。本遺跡の遺物を見ると、農村部に近い傾向がうかがえる。

植木鉢は、江戸市中と比較すると、出土量が少ない。瀬戸・美濃産の半胴甕の底部に穿孔した植木鉢や、19世紀前半に出現する土器製植木鉢も出土していない。強いて言えば、ミニチュア形の陶器製1点のみである。

次に、焙烙で比較してみたい。焙烙は、豆やゴマを炒めるための道具である。江戸市中では、竈もしくはへっついにかけるので丸底形、農村部では、囲炉裏にかけるので平底形と言われている。本遺跡のものは、平底と丸平底が共存しており、農村部と江戸市中の中間的様相を示すと言えよう。

なお、火鉢・火消壺等は、江戸市中の製品と器形や技法はよく似ており、江戸の影響を強く受けていると考えられる。

陶磁器で比較すると、63・65・67・68の陶器碗は、近郊農村で多く見られるもので、64・65の若松碗は近郊農村ではほとんど見られない。18・108は、瀬戸・美濃産の陶胎染付（肥前産のコピー商品）で、安価だったためか、農村部に多く出土する。6の鉄釉と灰釉を掛け分けた腰錦碗も、農村部で多く見られる器種である。272・274は肥前産の京焼風の食卓鉢類であるが、江戸市中の様相を示している。

以上、特徴的な焼物から、本遺跡の焼物の傾向をとらえてみた。全体的にみて、農村部の様相と江戸市中の様相が混在しているが、どちらかと言えば、江戸市中の傾向が強いように思われる。これは、元来農村部であった佐倉が、佐倉城下として発展し、江戸市中の物資を多量に受け入れるようになった結果とみてとれよう。ただし、この様相が、佐倉地域全体に言えるものか、本遺跡だけに特定されるものかは不明である。今後、近隣の近世遺跡との比較が課題である。

本遺跡は、佐倉城下の土井利勝の菩提寺跡の一部であることが明らかとなった。遺物の質・量ともに特筆すべきものがあり、今後の比較検討の好資料を提供したと言える。

注1・2・3 千葉県印旛郡役所 1913 「佐倉町誌」『印旛郡誌』

注2・3 佐倉市史編さん委員会 1979 『佐倉市史』巻三

国立歴史民俗博物館

佐倉城跡

赤羽東台遺跡

高崎川



調査前状況(南から)



調査区遺構全景(北から)



SD-001(西から)



SD-001土層状況(東から)



SD-001土層・遺物出土状況



SD-002(南から)



土壌跡土層 S-S' (南から)



S D-003土層(部分)



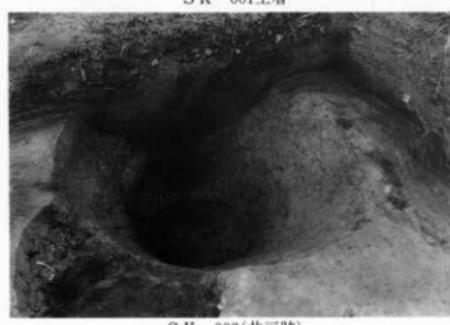
S Z-001(北から)



S Z-001調査風景(南から)



S K-001土層



S K-002(井戸跡)



S D-004(東から)



松林寺本堂(県指定有形文化財)



土井利勝父母・夫人供養塔(市指定文化財)



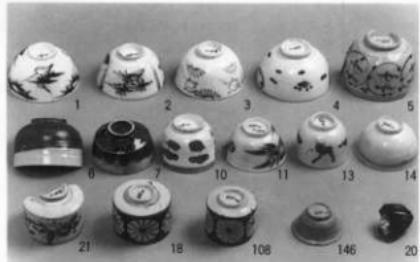
松林寺土壙跡(左検察庁、右千葉地裁)



松林寺土壙跡



『松林寺古絵図』・部分(松林寺所蔵)



1. 陶磁器 碗類(1)



2. 陶磁器 碗類(2)



3. 陶磁器 碗類(3)



4. 陶器 碗類



5. 磁器 皿類



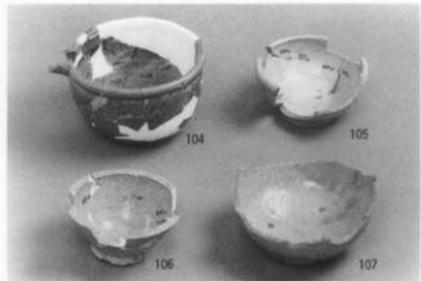
6. 陶磁器 皿類



7. 磁器 食卓鉢類



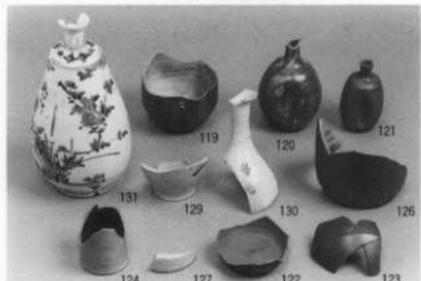
8. 陶器 食卓鉢類



1. 陶器 調理鉢類



2. 陶器 徳利類



3. 陶磁器 徳利類、磁器 花器



4. 陶器・土器 調理用具類



5. 陶器 煮炊具類



6. 土器 煮炊具類



7. 陶器 調理鉢類



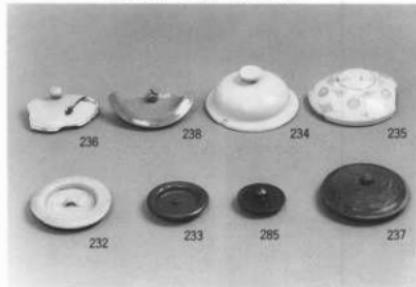
8. 陶器・土器 麦



1. 陶器·土器 灯火具類



2. 陶器・土器 暖房具類、土器調理具類



3. 陶磁器 蓋類



4. 胸磁器・土器 煙草道具類、化粧道具類、文具、ミニチュア、人形、基石



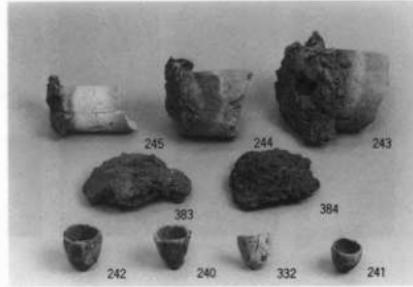
5. 陶磁器・土器 神仏具類



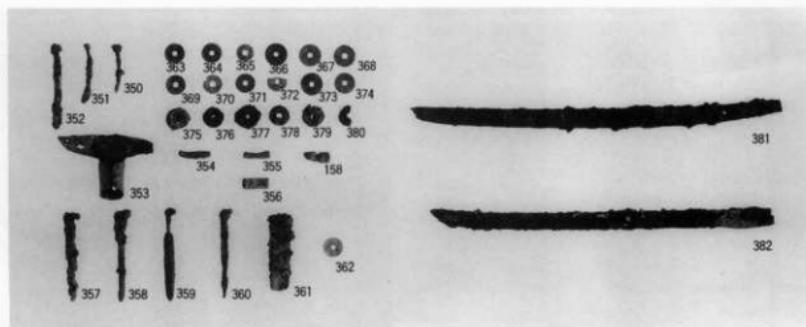
6. 瓦類



7. 石製品



8. 鐵治具類、鐵滓

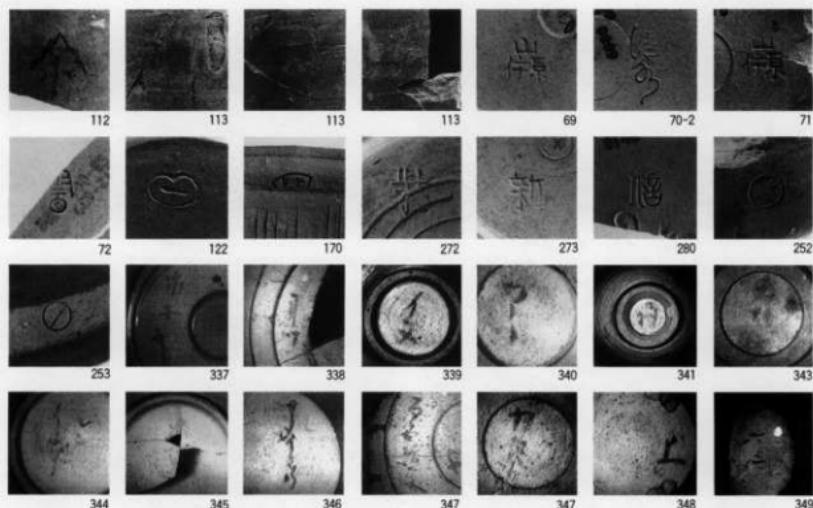


1. SD-001・SD-003・SK-001出土鉄銅製品、錢貨

2. SD-003出土刀剣



3. SD-001出土近代初頭陶磁器



4. SD-001出土釘書き、刻印、墨書

報告書抄録

ふりがな	さくらしみろくひがしだいいせき							
書名	佐倉市弥勒東台遺跡							
副書名	千葉地裁家庭裁判所佐倉支部埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第299集							
編著者	白鳥 章							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809番地-2							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
弥勒東台遺跡	千葉県佐倉 市弥勒町92 -6ほか	212	039	35度 42分 58秒	140度 14分 24秒	19960801 ~ 19960831	584	千葉地裁家庭裁判 所佐倉支部庁舎増 築に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
弥勒東台遺跡	寺院跡	中近世	旧松林寺土壘・堀跡 道路状遺構 掘立柱建物跡 溝状遺構 土坑 井戸跡	1条	1棟	1条	陶器、磁器、土器、鉄製品、 銅製品、錢貨、石製品、塙 場、鐵滓、瓦 松林寺古絵図の記載と土壘・堀跡の 位置が一致するこ とが判明した。	

千葉県文化財センター調査報告 第299集

佐倉市弥勒東台遺跡

千葉地裁家庭裁判所佐倉支部埋蔵文化財調査報告書

平成9年3月31日発行

編	集	財団法人 千葉県文化財センター
発	行	建設省関東地方建設局 千代田区大手町1-3-1
		財団法人 千葉県文化財センター 四街道市鹿渡809-2
印	刷	株式会社 エリート印刷 千葉市中央区市場町6-8
